
ベルの狩猟日記 P

P 琢磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベルの狩猟日記P

【Nコード】

N6078J

【作者名】

P琢磨

【あらすじ】

モンスターハンターのファンフィクション【ベルの狩猟日記】シリーズの短編集です。【ベルの狩猟日記】シリーズを知らない方でも楽しめて、知っている方ならもっと楽しめる物語（になる予定）。稚拙な部分も多いと思いますが、最後までお楽しみ頂けたら幸いです。

0101. 或る日の古龍迎撃戦（前書き）

【ベルの狩猟日記P】の“P”は“パロディ”の意です。“ポータブル”の意ではありませんw
尤も、三次創作と言うよりは、短編集や外伝だと思って頂けたら・
とw

第一話は初のリクエスト作品、“ザレアとヒロユキ”をイメージして綴らせて頂きました。
では、本編をどうぞ。

0101. 或る日の古龍迎撃戦

古龍迎撃戦。それは、^{ハンター}獵人なら誰もが一度は憧れる、獵人の中でも高名な者しか立ち会えないとされる、狩獵。

古龍とは、飛竜以上の長命を誇り、飛竜以上の強大さを誇る、この世界の生態系では頂点の座に君臨し続ける生物である。

古龍と飛竜の違いの中で特に顕著な点は、飛竜種が二脚有翼に対し、古龍種が翼の有無に関係無く、四本足で確^{しっか}りと体を支えている事。中にはその分類に当て嵌まらない古龍も存在するが、現在確認されている古龍のほぼ全てが、上記の特徴を有している。

そして古龍は、飛竜に比べて稀少な存在でもある。古より人類を脅かし続けた生物……ただ徘徊^{はいかい}するだけで天災規模の災厄を引き起こす時まで言われる、伝説上の生物である。もし彼らと遭遇する事が叶ったならば、それは不運なのか幸運なのか……傍目に見れば不幸以外の何物でもないが、中には彼らと矛を交えたいと言う奇特な獵人もいる。

——獵人とは、人類を脅かす生物——モンスターを狩獵する人間を指す。モンスターの強靱且つ強大な生命力と相対すべく、獵人は知恵を絞り、道具を用い、伎倆^{ぎりょう}の全てを懸けて立ち向かう。

一方モンスターは、己が本能に準じるままに行動し、それが人間の活動圏に差しかかった際に己^やむ無く獵人と衝突する事になる。

獵人が皆、モンスターの魔の手から人類を守りたいと言う、崇高な思想に基づく聖職者ではない。多額の報酬を目当てにモンスターを狩る者、モンスターから街を守ったと言う名声を欲する者、モンスターから剥ぎ取れる素材で誰も持ち得ぬ武具を生産する事に熱中する者、自分より強大な生物との戦いに命を賭ける至上主義者……目的は違うが、“モンスターを狩獵する”と言う点でのみ合致している。

そんな有象無象の獵人の中で、古龍は特別視される存在なのだ。

通常の巨大なモンスター……飛竜種や牙獣種、魚竜種、甲殻種などとは一線を画すモンスターである古龍は、勿論、狩猟した際の報酬は格別で、街を守り通したともなれば大陸中に轟く名声を手に入る事も叶う。更に古龍から剥ぎ取った素材で作成した防具ともなれば、誰しも羨望の眼差しを向けずにはいられないし、その強さは今まで体感した事の無いレベルである事は間違い無い。

怖いモノ見たさも勿論起因しているだろうが、前述の理由により、獵人になった者は皆、一度は古龍と相対したい、と希うのだ。

古龍と遭遇する事自体が稀少で、且つ古龍迎撃戦ともなれば高名な獵人……確りとした伎倆と実力を伴った獵人から選抜された、名実共に最高の獵人しか招集しょうしゅうされないのだから、もしそんな晴れ舞台に参戦できようものなら、何代にも亘わたって語り継がれる英雄譚になるだろう。

そして今日——ログ砦にて、一つの伝説が生まれようとしていた……

ログ砦内部——基地区画。

最低限の広さしかない区画に、三十人近くの獵人が詰め込まれていた。皆、歴戦の戦士である事を覗うかがわせる頑強な武具で身を固め、荘厳な雰囲気を漂わせている。佇まいを見ただけでも、その強さが滲み出ているように、周囲の空気を緊張させている。

緊張感溢れる部屋の中には、支給された道具が納められている収納ツクス箱が一つと、怪我人などを寝かせられる簡易寝台ベッド、バリスタと呼ばれる巨大な弩状いしゆみの兵器の弾や、砲弾などが所狭しと置かれている。ただでさえ窮屈な部屋の中に置かれているため、狭苦しさが倍増している。加えて言えば、獵人達の汗や体臭が充満し、空調など無い部屋は空気がこれでもかと澱よどんでいる。

部屋には時折、足許から震動が伝わってくる。ずん……ずずん……と、震動が起こる度に天井の梁から埃が舞い落ち、部屋の環境を更に悪化させた。

そんな部屋の隅に、一人の少年が縮こまっていた。

光沢を放つ紫色の防具――カンタロスUシリーズで身を固めている。背に吊っている武器は、双剣・インセクトオーダー改。武器にしる防具にしる、殆どに甲虫種^{ほとん}“カンタロス”の素材が使われている。周囲の猟人は皆、飛竜種や牙獣種などの、大型モンスターの素材から生産できる防具で身を固める中、彼だけが若干浮いているように見える。

甲虫種の素材で統一した少年――イルムは隅の方で縮こまりながら、小さく嘆息を落とした。

(……絶対に場違いだよな、おれっち……)

自分でも認識していた。けれども、二週間前に届いたハンターズギルドからの指令書には、何故かイルムの招集が記されていた。初めは手違いだと何度も自分に言い聞かせたが、村の人間は皆、既にお祭りムード。何の特産品も無い寒村から、初めて古龍迎撃戦に赴く実力を伴った猟人が出ると、村長共々狂喜乱舞である。流石にその浮かれきった空間で「いや、手違いですよ……」とツツコミを入れる勇氣は湧かず、泣く泣く村を出て、故郷から遠く離れた地にあるローグ砦へと赴いた次第だ。

現地に到着してハンターズギルドの人間に確認を取って貰ったが、間違いは無いと言われ、イルムは更に困惑した。寒村でのんびりと採取や採掘をして暮らしてきた自分に、どうしてハンターズギルドは古龍迎撃戦などに呼び出したのか。甚だ疑問^{はなは}と言うか、単に自分達の手違いを認めたくないだけなのではないか……と、軽い疑心暗鬼に駆られている始末である。

現に、周囲を取り囲む猟人達は皆、屈強な戦士然とした者ばかりだ。片田舎でケルビやモスと戯れていた自分とは体の造りがまるで違う。解り易く言えば、大人と子供ほどに、体格が違っているように映るのだ。

このまま何もせずに帰った方が無難なのではないか……完全にネガティブに思考が堕ちていく最中、無数にある出入口の一つから、

陽気な声が聞こえてきた。

「にゃー、オイラ、古龍迎撃戦って初めてなのにゃ！」

「そりゃそーだろ。俺だってまだ一桁だつーの。普通はなァ、古龍なんて生きてる内に一度も逢えない奴の方が大多数を占めてんだから、お前は良い方なんだぜ？」

「そんな貴重な体験が出来るのも、師匠のお陰なのにゃっ！　ありがとなのにゃーっ！」

それは……あまりにもこの場の空気にそぐわぬ、嬉々とした話し声だった。

自分はこの空間では異質だと感じていたイルムでさえ、二人の声を聞いた瞬間、自分の思考が馬鹿らしくなった位に。

程無くして部屋に入って来たのは、二人の獵人。一人はギルドナイツの正装をした青年。背には大長老の脇差と呼ばれる太刀を吊っている。もう一人は、獵人と呼んでもいいものか迷う姿をしている。頭にへアイルーフェイク〱と呼ばれる猫の被り物を被っているだけで、防具は何一つ纏わず、女性として大事な部分を覆うインナーのみと言う、最早裸と呼んでも差し支えない姿に、デッドリボルバーと呼ばれるハンマーを背中吊っている少女。

ギルドナイツの青年は集結した獵人全員を視界に入れるように立つと、大きく咳払いした。

「今回はラオシャンロン迎撃戦の招集に了承してくれた事に、ギルドナイツを代表して謝意を表する。――尤も、ラオシャンロンを撃退して初めて手前らに報酬を用意するつもりだ。全力で迎撃に努め、砦を護り通せ。俺からは以上だ。――つとと、名乗り忘れてたな。俺ァギルドナイツの騎士長、ヴァーゼだ。――以上」

部屋の中がざわめき始める。ギルドナイツの騎士長が予想以上に若かった事、そして彼が連れてきた少女の事……それだけで部屋の中は疑念に充ち満ちていた。

「――ちょっと質問いいか？　騎士長さんよ」そんな中、一人の獵人が挙手する。「あんたが連れてきた、そっちの嬢ちゃんは何だ？」

妹か？」

思わず部屋の中に失笑が混ざるが、ギルドナイツの騎士長——ヴァーゼは意に介する様子も無く、簡潔に一言。

「俺の愛弟子だ」

ざわめきは、今度は水を打ったような沈黙に切り替わった。皆の視線が、ヴァーゼからへアイルーフエイク〈の少女へと向けられるのが、空気で伝わってくる。

年端のいかぬ少女。加えて、防具は頭のへアイルーフエイク〈だけ。過剰に筋肉が付いている訳でもない、中肉中背の体。武器とて、稀少な物でも、況してや上級者が持つような高威力の代物でもない。この場に居合わせた獵人達が受けた印象は間違いなく——“役立たずが一人増えた”と言う物でしかない。

「おいおい、そんなメスガキ連れてきて、まさか戦わせるんじゃないかよ？」

野卑な笑声が飛び交い、好ましくない空気が流れつつある部屋の中で、イルムはまるで自分に言われたかのように、更に身を縮こまらせる。流石に彼女程ではないが、場違いなのは身に染みて判っている。今なら引き返せる——

「人を外見で判断する奴にやア碌な奴がいねエって聞いたが、まさかお前じゃねエよなア？」

静かに、ただその裏側には激情を孕ませ、ヴァーゼが応じる。たった一言で獵人達を黙らせる威圧感に、イルムも驚きに目を瞠った。ギルドナイツの騎士長とは言え、まだ二十代だろう。獵人としては全盛期でも、経験者にとってはまだ若輩者として映る。にも拘らず、吐き出した言葉には力があつた。数多のモンスターを狩猟してきた玄人ですら唸らせる……それだけの強さが、ヴァーゼにはあるように見えた。

軽口を叩いた獵人はばつが悪そうに舌打ちするが、ヴァーゼは澄ました表情で彼から視線を外すと、先刻、話題に上がった少女を脇に連れてきた。

「こいつア俺の愛弟子のザレアだ。實力はギルドナイツ騎士長の折り紙付きって言やア、流石に解るだろうよ？」

「にゃにゃっ、宜しくなのになゃっ！」

ヴァーゼの紹介を受けて矢面に立った少女——ザレアは、表情こそ見えないが、嬉々とした声調で手を大きく振る。先刻の話の流れをまるで介していないような素振りに、皆、毒気を抜かれたように奇怪な少女を見やった。

「さて……今回、ラオシャンロンを迎撃するに当たって、策って程でもねエが、二人から四人のパーティを組んで、パーティ別にラオシャンロンへ攻撃を仕掛けたいと思う。その方が皆も、いつもどおりの動きが出来るだろうしな。——異論はあるか？」

ヴァーゼの眼光に逆らえる者はいないのか、或いは彼の立てた策に満場一致なのか、挙手する者は現れなかった。ヴァーゼは詰まらなそうに片眉を持ち上げる。

「んじゃま、銃士はエリア1にて待機。剣士はエリア2で待機。エリア1からエリア2にラオシャンロンが移動次第、銃士はエリア2で待機中の剣士の部隊と合流、そこからは総力戦だ。……言っとくが、全力で事に当たれよ？ 相手は、——天災だ。くれぐれも、ただのモンスターだと思ふな。以上！！」

作戦の説明が終わった瞬間、猟人達が動き始める。いつものメンバーで纏まる者や、人数が足りずに別のパーティに割り込む者、メンバーを募集する者など。各々に動き始めた中で、イルムはやっぱり隅の方で縮こまっていた。

誰からも声を掛けられる事は無く、誰の邪魔にもならないように隅にいただけ。何れ時が来れば、自分は一人でラオシャンロンに挑む事になるだろう。ラオシャンロンと相対できただけで、ここに来た価値は充分にある。後は自分のペースで頑張れば……と思つて俯うつむいていると、不意に天井に下げられていた電灯の明かりを遮る影が出来た。

何だろうと思って頭を上げると、眼前にアイルーの顔が広がった。

「……………ッッ!？」

驚きのあまり、声が出ない。心臓が口から飛び出るかと思う程に驚いていると、猫頭の奥から愛らしい少女の声が漏れてきた。

「にゃにゃつ、君は誰かとパーティを組まにゃいのにゃ?」

「お、おれっちの事?」戸惑いながらも自分を指差すイルム。「無理無理! どう考えてもおれっち、ここにいちゃいけない奴だつて!」

「にゃ?」キョトン、とするザレア。「ここにいちゃいけにゃい獵人なんて、いにゃいにゃよ?」

「…………お前は、ギルドナイト騎士長の愛弟子だから、別にいいんだろうけど…………」悄然しょうぜんと嘆息を落とすイルム。「おれっちは手違いでここにいるんだよ、絶対…………」

「にゃ?」よく分かんにゃいけど、だったらオイラ達とパーティ組まにゃいかにゃつ?」

ひよい、と小さな手を伸ばしてくるザレア。その表情はへアイルーフェイクに阻はばまれて垣間見えないが、それでもイルムには解った。——笑顔。同情や憐憫れんびんからは程遠い、純粹無垢の笑顔がそこにある気がした。

「お、おれっちなんか誘っても、何の役にも立たないぜ…………?」

それでもイルムの疑心暗鬼の氷は、解凍される直前で再び凍結を開始する。彼女が良心で誘ってくれているとしても、確実に自分は彼らの足を引っ張る。こんな若輩獵人など、ラオシャンロンを前にして巧く立ち回れる筈が無いのだ。

「役に立つかどうかは、手前が決めるもんじゃねェだろ? まずは立ち向かってみる。話はそれからだ」

告げたのは、ザレアの背後に立っていたギルドナイト騎士長——ヴァーゼだった。彼は静かにイルムを見下ろすと、挑発的な瞳で親指を立てる。

「俺アな、見込みのねェ奴なんぞ呼ばねェんだ。手前にゃア可能性

がある。やるだけの事をやれ。それでダメでも手前は胸エ張れるんだ。それすら出来ねエなら、手前は獵人じゃなくても続かねエよ」

「……………」

ヴァーゼの言葉には、毒が無い。彼なりに励ましているのだと思
い、イルムは立ち上がってザレアの手を取った。

「おれっちを、パーティに加えてくれ！」

自信を持って開いた口から出たのは、先刻の自分とは思えぬポジ
ティブな台詞だった。

——そうして、ラオシャンロン迎撃戦は幕を上げた……………

0101. 或る日の古龍迎撃戦（後書き）

ヒロユキがない罫。

今回も【ベルの狩猟日記6】と同様に、まったりと更新させて頂き
ます^^

では、最後までお楽しみ頂けたら幸いです^^b

※追記

今回の物語で活躍する看板娘を専属ファンに描いて頂きましたw
>i4244—732<

多分、これが最初で最後のイラストになると思いますw

0102. イルム(前書き)

古龍迎撃戦の物語なのですが．．．
狩猟シーンは殆どありませんw
悪しからずー(．．．)ー

ではでは、本編をお楽しみに♪

0102. イルム

ずうん……ずうん……と、砦全体を揺さ振る震動が徐々に大きくなるに連れ、エリア2で待機する獵人達ハンターの間に俄にわかに緊張が走る。

エリア2に限らず、砦は周囲を霧に覆われ、視野があまり利かない。その中で、遠雷のように響く地面を踏み締める音と、それに伴う震動に、恐怖を覚えぬ者など絶無――

「にゃーっ、ワクワクするのにゃ！ 早くラオシャンロン、来にゃいかにゃー♪」

「まあ落ち着けてザレア。――俺が一番に殴るんだからな！？」

順番、間違えんなよ！？ 俺が一番だぞー！！」

――の筈だったが、二名ほど別の意味で落ち着いていない。

「……なあ、あんたら、怖くないのか……？」

何と無く敬語は要らないような気がしたイルムは、ギルドナイト騎士長、並びにその愛弟子に向けて溜口を利くが、二人とも全く意に介さず応じる。

「だって、初めてラオシャンロンを見るのにゃよっ！？ ワクワクせずにいられにゃいにゃっ！！」

「イエア！ 一番に射撃・砲撃するのは許すが……奴を最初に殴るのは俺って決まってるんだ！！ ウオオオオオ！！ 燃えてきたぜエエエエッ！！」

と、突然、発狂したのかと思う程の喚声を上げるヴァーゼ。思わず顔を顰しかめて耳を押さえる間に、何故かギルドナイトスーツを引き抜き、上半身裸になるヴァーゼ。

「何してんすかあんたア！？」思わずツツコミを入れざるを得ないイルム。

「ハアハア……ん？ いやもう、ラオシャンロンがすぐそこまで来ていると思うとよオ……体の底から熱が込み上げてきてよオ……もう我慢できねェんだよオオオオ！！」

ばりーんっ、と筋肉の蠕動^{ぜんどう}だけでギルドナイトスーツを完全に粉砕するヴァーゼ。その下から現れたのは、一枚のフンドシだけ。もう、殆ど^{ほとんど}全裸である。

「ふう……よし、いっちょ体を温めるか！ ザレア！！ 無限スクワット始めるぞ！！」言いながら既にスクワットを始めているヴァーゼ。

「はいにゃ！！ あ、イルム君もどうかにやつ？ 一緒にやらにゃい？」隣で仲良くスクワットを始めるザレア。

「いや、遠慮しとく……」思わず視線を逸らしてイルム。

エリア2には何故か、ラオシャンロン^{たむろ}の闊歩音とそれに伴う震動の他に、二人の獵人が発する呼気が響き始めた。勿論、周囲に屯する待機組の劍士達は皆、物凄く気まずそうだ。

「うう……何か凄く気まずい……」

同じパーティーの仲間と言う事もあり、気まずさMAXのイルムは、赤面して二人からこっさり距離を取る。

「ふっ、ふうっ！ まだまだ準備体操が足りねエぞザレアア！！ もっとだ！！ もっと熱くなれよ！！」

「にやつ、にやつふうっ！ だったら師匠！ ガチ組手をするしかにゃいにやつ！」

十分ほどで二千回近くのスクワットをしておきながら、まだやり足りない^ぬと吐かし始めるヴァーゼに、同じく十分ほどで二千回近くスクワットをしたザレアが提案したそれは、良からぬイメージしか湧かない単語だ。

イルムは「いや、もう充分、熱くなってるよ！ 寒中水泳でもそんなにしないよ！！」と必死にツツコミを入れるが、二人とも全く聞いていない。

「ガチ組手か！ なるほど……あれなら確かにガチで熱くなれそうだ！！ だがなザレア……死んでも、文句は言うなよ？」

「にやつふうっ……遂に師匠を越える時が来たのにゃ！ 覚悟にゃーっ！！」

そう言っ
て始めたのは――両者共にモンスターを狩るために使う武器を使った、真剣勝負だった。

ヴァーゼは大長老の脇差を鞘から引き抜き、一切の加減も無くザレアへと突っ込む。洗練された動きに躊躇の色は絶無。本気で殺しに掛かっている。

対するザレアもデッドリボルバーを引き抜くと、脇に抱えるように力を溜め込み、ヴァーゼの突きを紙一重で躲しつつ、溜め込んだ力を解放するようにデッドリボルバーを振り上げる。ブオンツ、と空気を裂く音は、モンスター相手にしても尋常ではない臂力が込められている。

一撃でも当たれば即死――そんな危険を孕んだ組手が、何故かラオシャンロンを待機する狩場で勃発した。

敢えて端的に言おう。――理解不能である。

ラオシャンロンが侵攻しつつある中、突然二人してモンスターを狩猟するための武器を持ち合って殺し合いを始めたのだ。獵人として以前に、人間として色々間違っていると言わざるを得ない。

「ちよちよッ!? 何やらかしちゃってんだあんたら!？」

ツッコミを入れるが、手は出せないイルム。周囲の凄腕獵人ですら声を掛けるのに躊躇いを隠せないにも拘らず、イルムは敢えて中央に入り込むようにして仲裁する。片や轟音を響かせるハンマーを振るい、片や大気すら切り裂かんと太刀を振り回している。その只中に飛び込む様は“勇者”以外の何者にも映らなかった。

その場に居合わせた獵人全員の脳裏にイルムの絶命が過ぎった――が、現実にはその妄想が履行される事は無かった。

ピタリ。イルムはヴァーゼとザレアの手首を握り締め、動きを完全に止めたのだ。その行動に周囲の凄腕獵人だけでなく、先刻まで争っていた二人の変人も動揺を隠しきれなかった。

「ラオシャンロンがもう目の前まで来てんのに、何だっ
ていきなり殺し合っ
てんだよ!? ちよつと頭を冷やそうぜ!？」

イルムの諫言が朗々とエリア2に響き渡る。その時点で、イルム

は自分が注目の的になっている事に気づいた。顔を紅潮させ、慌てて周囲に向かって頭を下げまくる。

「すすす済みませんッ、何でも無いんですッ、皆さんは持ち場に――」

「――兄ちゃん、おめえ、すごいな」「何だ、今の……?」「不覚にも動きが見えなかったぞ……!!」

「――戻って頂けると……え?」

不意に掛けられた言葉に顔を持ち上げると、周囲の凄腕獵人が感心したような面持ちで自分を注視している姿が視界に飛び込んできた。しかも、先刻までの疎外感を与える余所余所しい視線ではなく、尊敬や憧憬を孕んだ、熱い視線が大半を占めていた。

イルムが訳も解らず困惑していると、大長老の脇差を鞘に戻したヴァーゼが、驚き冷め遣らぬ表情で肩を叩いてきた。

「ヴァーゼ?」振り返るイルム。

「いや、お前よオ、獵人の全力の攻撃を止められるか普通?」どんな反射神経してんだよ」

――そうなのである。獵人が繰り出す攻撃とは即ち、強靱な生命力を誇るモンスターの息の根を止める程の威力を有している。速度も然る事ながら、その威力は、暴力の権化たる金獅子ライザンには遠く及ばずとも、同業者である獵人でも制止する事など不可能だ。

そしてタイミングも絶妙と言えた。あと僅かでも遅れていれば、イルムの体は両断されていたか弾け飛んでいたか……何れにせよ、即死だったに違いない。

イルムはキョトンとしていたが、遅れて頬をポリポリと掻き始める。

「いや……てか、獵人って普通、この程度の事は……」

「出来ねーよ。――で?」どんな鍛練積んだらこんな事できるようになるんだよっ?」

言うまでも無く、ヴァーゼの瞳には爛々らんらんと眩い光が点っていた。
オモチャ
新しい玩具を見つけた子供の目である。イルムはどう反応すればいい

いのか困ってしまい、今度は後頭部を搔きながら眩きを落とす。

「鍛練って……おれっちの村の近くって、ランゴスタとかカンタロスが、繁殖期になると大量に発生するんだよ。あいつらの挙動って、よく見るとパターンあるだろ？ それを見極めて素手で捕まえるよりは、この方が何倍も楽だと思うけどなあ……」

イルムが苦笑混じりに言を投下すると、その瞬間、エリア2はラオシャンロン足踏み以外の音が消滅した。「うわ、おれっち、何か変な事、言ったか……？」と恐る恐る周囲の獵人達の顔色を窺うように怯え始める。

「――すっげえなイルム！」

音が消えた世界に、ヴァーゼの喉から発せられた爆音が木霊する。思わず周囲に集まっていた獵人達が両耳に手を当ててしゃがみ込む中、ヴァーゼは瞳を爛々と輝かせてイルムの肩を叩く。イルムは突然の咆哮に呆然としていたが、恥ずかしそうにヴァーゼの手を振り払う。

「何が凄いだよつ、こんなの獵人なら誰でも……」

「ンな訳ねーだろツ！ ランゴスタを素手で捕まえるだア！？ 確かに奴は武器を使えば数撃で木っ端微塵だがな、あのスピードを素手で捕捉するなんざ、獵人でもいいねーよ！」

ヴァーゼの発言に、周囲の獵人達が頻りに頷^{しき}いている。

――ランゴスタ。甲虫種に分類されるこのモンスターは、巨大な蜂を連想するとイメージが掴み易い。あらゆる狩場に存在する生命力の高さ、そして繁殖力の強さで、獵人の周囲を付かず離れず飛び回り、ここぞと言う時に麻痺毒の針を刺しに来る。ランゴスタの些細な一撃で、飛竜の攻撃をマトモに浴びて戦線から離脱せざるを得なくなった獵人は少なくない。獵人が忌み嫌うモンスターである。

そんなランゴスタだが、あくまで甲虫種――巨大化した虫に過ぎないので、獵人から武器による攻撃を受けると、二・三撃で粉々に砕け散ってしまう。そこで、狩場や目的となる大型モンスターによっては、エリア内にいるランゴスタをある程度、殲滅してから狩獵

を行う獵人も少なくない。ただ、ランゴスタの動きはどんなモンスターよりも機敏——地上最速を誇るキリン程ではないにしろ、宙を舞う生物の中なら一・二位を争う程である。

近接攻撃が専門の剣士は勿論の事、遠距離攻撃を主とする銃士ガンナーですら手を焼く厄介者——それがランゴスタなのだ。それを素手で捕まえるなど、前代未聞である。

「イルム君、凄いのじゃ！ 今度、オイラも挑戦してみるのじゃ！」

何故かへアイルーフエイクの瞳の部分が輝いて見えるが、錯覚だと言い聞かせるイルム。彼は苦笑を滲ませつつ、周囲に群がる獵人の視線が一変した事に気づいた。先刻までの視線——疎外感を感じさせる余所余所しさが消え、羨望とはいかないまでも、“イルム”という存在を認めてくれたような、温かさを感じさせる視線になっていた。

イルムはそれをこそばゆく感じながら、頭を掻いて照れ隠しをする。

「——つまりだ。ランゴスタを素手で捕縛する術を身に付けたら、獵人の繰り出す攻撃を見切れる上に、的確なポイントを衝けるようになる……と。——くはッ、堪らねエ！！たま ゾクゾクしてきやがるぜ！！」

隣でブツブツ呟いていたと思うと突然、体を震わせて嬌声を上げ始めるヴァーゼに、違う意味で背筋がゾクゾクするイルム。大丈夫か、この人……とツツコミを入れそうになるが、敢えて口内に押し留めた。

やがて、ラオシャンロンの姿が朧気に見え始めた——

0102. イルム（後書き）

前書でも綴らせて頂きましたが、古龍迎撃戦と謳いながらも狩猟シーン
は全編通しても本当にちよろっとしありませんw

【P 作品 狩猟を期待 したら／（＾p＾）／】
※字余り

次回も狩猟シーンはありますが、遂に件の彼が登場する予定です
w

0103. ヒロユキ(前書き)

副題どおり、遂に彼の登場ですW

狩猟くコメデイの作品であると強く念を押しつつ・・・

本編をどうぞ♪

0103. ヒロユキ

「あ、あんな奴に敵う訳ねえっ!!」 「幾らなんでも、でか過ぎる!!」 「どう戦えってんだ!？」

エリア1——砦の出っ張りである射場からラオシャンロンへと射撃を加えた銃士^{ガンナー}の部隊が帰還し、更にエリア2にその巨像が視認できた頃から、あちこちで獵人^{ハンター}の弱音とも取れる喚声が上がりはじめた。そう——ラオシャンロンと言うモンスターは、巨大過ぎた。獵人達が全力を賭して狩猟してきた大型モンスターとは確実に一線を画す規模——飛竜が人間の五倍ならば、ラオシャンロンは飛竜の五倍あるだろう。“老山龍”と呼ぶに相応しい、まるで山脈^{はいかい}が徘徊しているかのように圧倒的な存在感。

熟練の獵人ですら尻込みし、達人級の獵人ですら戦線離脱を余儀無くされるモンスター——古龍種。ラオシャンロンの彪大^{ぼうだい}なる巨体を見据えただけで、その片鱗を垣間見たような気分だ。

恐怖を口に出す者、恐怖を内に溜め込んで青褪める者、恐怖で言葉が出ない者……程度の差はあれど、皆、一様に聳^{そび}える巨像に慄^{おの}いていた。“勝てる訳が無い”——そう、本能が絶叫しているのだ。

その中に、胸を張って迎え撃つ“モノ”がいた。

「——あんな龍、何て事アねえ」

熟練の獵人ですら怯える様相を呈している中、微塵も動じずに巨龍を迎え撃つその“モノ”は——対巨龍爆弾。……獵人ではなかった。

「——って、ヒロユキが言ってる気がするにゃ!」

——加えて言えば、対巨龍爆弾の名前が“ヒロユキ”で、「——あんな龍、何て事アねえ」はザレアの吹き替えである。

それを至近距離で聞いたイルムは、暫く乾いた微苦笑を浮かべていた。

——時間は少し遡る。さかのぼ

銃士隊がエリア2に戻って来て、ラオシャンロンの動向を伝えると同時に、その圧倒的な存在感に吞まれてしまつて獵人達は醜態を晒した。その時、砦の中からガラゴロと荷車が走る音が響いてきた。そちらに皆が視線を向けると、一人、〈アイルーフェイク〉の瞳がハート型になったような錯覚を生じさせる程に感極まる獵人がいた。

「爆弾だにやっ!!」

——勿論、ザレアである。彼女の宣言どおり、砦の中から運ばれてきたのは爆弾——それも普段使っている大タル爆弾Gとは若干違う造りの爆弾。運んできたのはアイルーとメラルーのペアだ。

——アイルーとメラルー。共に獣人族と呼ばれる種族のモンスターで、二本足で屹立するネコと言えばイメージが掴み易い。基本的にアイルーは白毛、メラルーは黒毛。共に人語を解する程の知能を有し、またその愛らしい姿から一般人に人気が高いモンスターだ。けれど獵人の中には、狩場で道具を掠め取るメラルーや、爆弾を投げつけてくるアイルーに手を焼く者は多く、場所が違えば問答無用で斬り捨ててしまう位だ。

二対の白黒獣人族は、共に額の汗を拭う仕草をすると、普段とはどこか違う爆弾を地上に下ろす。

そこにザレアが飛び込んでくる。

「こここっ、これは何て言う爆弾だにやっ!?!」二匹の獣人族に飛びつくザレア。

「ニヤニヤっ、ニヤんだお前!? いきなり飛び込んで来ニヤいで欲しいニヤ!! ヒロユキが爆発したらどうしてくれるニヤッ!?!」胸を押さえてたじろぐメラルー。

「そうニヤそうニヤっ! こんなニヤ所でヒロユキを爆破されたら、爆弾作って八十年のご主人様に合わす顔が無くニヤるトコだったじやニヤいか!?!」憤慨するように地団駄を踏むアイルー。

「……ヒロユキ?」

展開に置いて行かれたように、どこか遠い眼差しで呟くイルム。
その呟きを耳聴く聞き取った二匹の獣人族は、「「そうニャー!!」」
と綺麗なハーモニーを響かせた。

「これぞ名匠、“爆造のロージョ”の自信作、対巨龍爆弾こと“ヒロユキ”ニャー!!」

「古龍の中でもシェンガオレン、ラオシャンロンの上にしか製造しニャい、特注品の中の特注品なのニャー!!」

「今回もハンターズギルド直々の発注を受けて、ボク達二人でここまで運んで来たのニャっ!!」

メラルーとアイルーは、それぞれ“ヒロユキ”——対巨龍爆弾の左右に立って自信たっぷりに腕を広げて紹介する。周囲の獵人の様子と言え、
「ふうん……」 「そうなのか……」 程度の冷え切った反応だが……

「にゃ……にゃん……だと……!!? まさか“爆造のロージョ”の自信作に巡り合えるにゃんて……っ、か、感激なのになー!!」

一人だけ、体を震わせて感動を体現する獵人がいた。思わずヒロユキにしがみつき、
「アイルーフェイク」で頬擦りを始める程に、対巨龍爆弾に愛を注ぐ獵人。——勿論、ザレアである。

その様子を見ていた二匹の獣人族は、互いに顔を見合わせ、それからザレアに声を掛ける。

「あんた、見る目があるニャー! しかも、名匠“爆造のロージョ”を知ってるとは……あんた何者ニャー!?」 カツと、ネコ目を見開いて怒号を張り上げるメラルー。

「只者でニャい事は確かニャ……ニャニャニャ?」
「アイルーフェイク」に、インナー姿のハンマー使い……もしや貴様、噂に聞く「アイルー仮面」かニャー!?」
クワツと両眼を掻っ開いて迫るアイルー。

「「アイルー仮面」……?」
今度はザレアに遠い眼差しを向けるイルム。

「いかにも! オイラが「アイルー仮面」にゃ! オイラを知って

る方がいるなんて、初めて知ったのにゃ!!」感激したように飛び跳ねるザレア。

「勿論知ってるニャ! ボク達獣人族の期待のホープとして有名ニャんだからニャ!!」
〈アイルー仮面〉に憧れるアイルーメラルーニャんで、そこら中にいるニャ!!」

「う、嬉し過ぎるにゃっ!! 感激だにゃっ!!」

二匹と一人(いや、もう三匹と言った方がいいのか)は、ラオシヤンロンが進撃しつつある戦場で和氣藹々わきあいあいと談笑に花を咲かせている。イルムは遠いお花畑で見えないランゴスタとキャッキヤウフフと戯れていた。

「〈アイルー仮面〉にニャら、こいつ——ヒロユキを任せておけるってもんニャ!」ぼん、とヒロユキに触れるメラルー。

「ボク達には、ヒロユキの最期を見届けて、その生き様をご主人様に克明に伝える任務があるのニャ! 一緒に狩猟を手伝う事は出来ニャいけれど……大丈夫ニャ! 〈アイルー仮面〉は皆のヒーローだからニャ!!」ぐっ、と肉球の拳を固めて掲げるアイルー。

「二人とも……っ!!」ぐしぐしっ、と〈アイルーフェイク〉の目許を乱暴に腕で擦こすると、ザレアは意気揚々と拳を固めた。「やってみせるにゃ! ヒロユキに危ない橋なんて渡らせにゃい……ラオシヤンロンなんて、オイラが取っちめてくれるにゃ!」

最後にザレアが胸を張って告げると、二匹の獣人族は「頼んだニャ!」「任せたニャ!」と前足を振り、ぴよんぴよんっ、と四足歩行で砦の中へと戻って行った。

「……あ、話、終わったのか?」

頭の中で「にゃーにゃー」と獣人族の鳴き声が木霊しているが、何とか幻聴を振り払ってイルムが尋ねる。ザレアは興奮しているのか、「うにゃっ! 頑張るにゃよっ、イルム君!」と鼻息荒く応じて、腰に下げたデッドリボルバーを掲げるのだった。

そして時間は元に戻る。

「くーっ、格好良いなヒロユキ！　だが俺ならこう言うぜ……『勝てねエと思ったら逃げな。こっからは、強者同士の戦いだ……!!』……ってな！」

ヒロユキの発言（ザレア吹き替え）を受けて、ヴァーゼが身悶えしたかと思うと、いきなり臭い台詞を吐き出して自分に酔い始めた。もうどうしようもない位に人として終わっている気がして仕方ないイルム。

そんな頭逝っちゃってる青年の発言に、その愛弟子は「うにゃっ、師匠の台詞も格好良いのにゃっ！」と飛び跳ねている。イルムはそのテンションに欠片も付いていけない。周囲を見ると、呆れているか憫笑^{びんしょう}しているかの二択しかない反応が待っていた。

「お、おれっちは違うぞ！　おれっちはマトモだからな！　マトモだからーっ！！」

——言わずもがなだが、自分を“マトモだ”、“普通だ”と言う人間に限って、マトモや普通とは程遠い事が多い。

「違うんだーっ！！」イルムの絶叫がエリア2に響き渡る。

「所でザレア。いつもの爆弾祭りはどうした？」

イルムの心底からの絶叫など欠片も意に介さず、ヴァーゼはザレアの周囲を見て腕を組んでいる。その一言でイルムの絶叫が鳴り止んだ。

「おめエ、いつも山ほど爆弾持ってくるだろ？　ギルドの規定を無視する事ア流石にねエけど」

「……なあ、ヴァーゼ。ザレアってその……爆弾狂なのか……？」

我慢できなくなって遂に問いを発してしまうイルム。先刻の対巨龍爆弾の反応と言い、今のヴァーゼの発言と言い……爆弾に取り憑かれているとしか思えない溺愛ぶりだ。

獵人の中には爆弾を愛用する者が少なからずいる。大型モンスター¹の体力を大きく削り取る爆弾。特にソロで活躍している獵人は、一人の力で強大なモンスターを相手にするため、攻撃力が不足する事が多々ある。それを補うのが爆弾や罠などの道具類である。

ただ、爆弾はその性質上、好んで使いたがる猟人はいない。信管が無く、起爆するには衝撃を与えねばならないのだが、その衝撃と言うのがほんの些細な力——単に蹴飛ばしたり、拳を打ちつけたりするだけで爆発するのだ。単に街から狩場へと赴くだけでも、走行中の竜車が石ころを踏みつけただけで竜車諸共爆発——そのまま猟人も御者も帰らぬ人となる事例も報告されている。

狩場でもその危険性は同じだ。荷車で運ぶにしても、ランポスの飛びかかり、ランゴスタの突つき、或いは荷車の転倒だけで、猟人の命は紙屑のように消し飛んでしまうのだ。命を危険に晒す状態を絶え間無く続けて、精神がどうにかならない方が土台無理なのだ。「ん？ あア。ザレアに爆弾を教えたのは他でもねエ俺でな。以来、爆弾が傍にねエと落ち着かねエ奴になっちまった。ヒハハハハ！」

「笑い事じゃないだろ！？ 何その異常者！？ 爆弾が傍にあったら普通、怖いだろ！？ ねえ、怖いよね！？ おれっただけじゃないよね！？」

「にやにやつ！？ 聞き捨てにやらにやいのにやつ！ 爆弾は心のオアシス……爆弾は平和の象徴なのにや！！」

「百八十度違うよ！！ 爆弾が平和の象徴の世界なんて、混沌以外の何物でもないよ！！」

ぎゃーぎゃー喚き合う三人の猟人。その三人の半径二十メートルに空白の円陣が作り出されている事に気づく者はいなかった……

「で、爆弾はどうしたんだ？ まさか……胃袋の中から出すつもりじゃねエだろうな！？」ガラリと片目が煌くヴァーゼ。

「人間！？ ザレアって人間だよな！？」絶叫するイルム。

「今回は胃袋じゃにやいのにや！ この砦のそこら中に埋め立てていたのにや！」

——刹那、まるで陽気な音楽が鳴り始めたかのように、猟人達が軽快な動きで踊りだす！

……ように見えるだけで、地面に埋まった爆弾に怯えて飛び跳ねているだけだったりする。

「にやにやつ!? 皆、楽しそうだにやつ、オイラも混ぜてにやつ!」 ザレアも調子に乗って飛び跳ね始める。

「ちよちよちよ————ッッ!? 爆弾を埋め立てたって、地雷!?! 地雷原と化してるのこの砦ッ!?」 発狂寸前のイルム。

「なるほど……そいつアヒートアップせずにはいらねエなアベイビイイイイイイイ!」

何故か全力疾走で砦の外周の一部であるエリア2を駆け回り始めるヴァーゼ。そして時折緊急回避——何も無い所に向かって飛び込んでは立ち上がり、走り込んでは飛び込むを反復し始める。

「落ち着いて!? おれっちも大概落ち着いてないけど、ヴァーゼはもっと落ち着いて!」

「にゃーっ、師匠待ってにゃーっ! オイラもするにゃーっ!」

そしてザレアがヴァーゼに続くように飛び込み始め——狩場は混沌を極めた。

別の意味で狩場は熱くなっていた。

0103. ヒロユキ（後書き）

次話は一応狩猟シーンなのですが・・・
モンハンパロとは思えぬ程の短さです。
メインはコメディ！ 狩猟は二の次！

ではでは、次話をお楽しみに♪

0104. 爆弾祭り（前書き）

カテゴリに新たに入れておいた“狩猟がガツカリ仕様”。

今回の話で発揮されますw

絶望的な事に、これで大体狩猟シーン終了ですw

ではでは、本編をどうぞ♪

0104. 爆弾祭り

「き、来たぞーっ!!」

地雷原騒ぎで程好く体が温まってきた獵人達ハンターの間に、遂に死刑宣告とも取れる開幕の怒号が響き渡った。その宣言を聞いた獵人達はようやく落ち着きを取り戻し、「つ、遂に始まるのか……!」と既に疲労困憊こんぱいの表情で顔を持ち上げる。

ローグ砦と言う狩場は、砦外周部を四つに区切り、エリア1は砦に備えつけられた射場、エリア2と4がまさに巨大なモンスターが進軍する砦の外周部に当たる。そして最後の関門であるエリア5は、砦と巨大モンスターが正面衝突するエリアになる。ここに辿り着く前に何としてでも巨大モンスターを撃退せねばならないのだ。

その外周部は、幅にして百メートル以上の広さがあるのだが、巨大モンスター——ラオシャンロンにしてみれば、狭苦しい通廊でしかない。幅一杯に巨体が広がり、両端に巨大な前脚が踏み下ろされる度に大地が鳴動し、獵人達の足を竦すくませる。

長い首の先にある頭部は、山脈の裾くらいにあり、何とか獵人達の攻撃が届く場所にある。だが、そこに向かって行く者はいない。何故なら——

「————ふっふっふ……」

ラオシャンロンを前にして——フンドシー丁の青年が、腕を組んで仁王立ちしていた。その表情に浮かぶ色は——稚気。体は完全に成熟していると言うのに、内面から駄々漏れている子供っぽさに加え、笑みが口許を突破して目許にまで辿り着いている。

——言ってしまったえば、楽しくて楽しくて仕方ない顔である。

「ラオ、シャン、ロオオオオンツツ!!」

檄げきが天を劈つんざく。ビリビリと大気を震動させる怒号に、後方に控える凄腕獵人達は両耳を押さえて蹲つすくまる。——そう、まさにヴァーゼの怒号は、大型モンスターの咆哮に匹敵する程に、純度の高い敵意を

獵人ならば、射竦める程の効果があつただろう。――しかし、相手は超常の権化とも呼ばれる古龍。意に介す事すら無く、ただ己がペースで行軍を続ける。その足取りに、変化は一切見られない。

「俺アヴァーゼ!! 手前と全力で屠り合うために馳せ参じた獵人だア!!」

「ンじゃア前口上はこんなモンで——始めようかア!!」

トンツ——と、軽く跳躍したかと思えば、ダンツ——と、着地した瞬間に、その姿は掻き消えていた。強靱なる脚力を用いた爆発的な初速で、ヴァーゼはラオシヤンロンとの距離を殺し——野獣のように荒々しい動きで拳を叩き下ろす——

“ラオシャンロンの頭が、地面に埋没する瞬間”——を。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ——
——ツツツツ！」

規模が違い過ぎる生命同士の衝突。その行き着く未来など、想像するまでも無く解り切っている。脆弱な存在は、強靱な存在に呑み込まれてしまう。それが自然の摂理だからだ。どれだけ抵抗しても、結果が覆る事は有り得ない。

31

“古龍を拳一撃で沈める”人間など、どんな英雄譚にも出てこない。

——そう。この場に居合わせた獵人は皆、後世にこう語った。

“俺は、生ける伝説を目の当たりにした”——と。

「ヒーハーッ！！ 者共、掛かれイヤアアアハアアア——
——ッッ！！」

ラオシャンロンが奏でる地鳴りと共鳴するように、ヴァーゼの喊かん声せいが朗々と大気を駆け抜けた。

心の底に眠る闘志を刺激されたかのように、それまで沈黙を守っていた凄腕獵人達は喚声を掻き立て始める。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ——
——ッッッッ！！」

——伝説を刻め。ヴァーゼの喊声からその意志を抽出し、獵人達は狩場を駆け抜ける。

熾烈な狩猟が始まる——古龍と凄腕獵人の鏖迫り合いの幕開けである。

ラオシャンロンと言う巨像に群がる獵人達。或る者は四肢を集中的に攻撃し、また或る者は頭上に見える腹部を切り刻み、そしてまた或る者は頭部を殴り打ち、更に或る者は背中を狙い撃つ。三十余人の一斉攻撃を受けても、ラオシャンロンは漸進ぜんしんを緩めない。先刻ヴァーゼが鮮烈な一撃を加えたのが嘘のように、巨像は怯む様子を見せずに、己がペースで邁進まいしんを続けている。

「——ヴァーゼ。さっきの一撃、もう一回やってくれよ」

双剣——インセクトオーダー改を振り回しながら声を掛けるイルム。振り回されるインセクトオーダー改から発せられる刃音は、その元となった素材が由来するのか、甲虫種が発する鳴き声のような風声を奏でている。

イルムがいる場所はラオシャンロンの右の後ろ足。前進と共にゆらゆら揺らめく長い尻尾と後ろ足に巻き込まれないように注意しつつ、後ろ足の腱を狙って双剣を叩きつけ続ける。

流石に古龍種に属するだけあって、飛竜種にはない硬質な鱗、堅牢な甲殻を有しているため、生半な武器では弾かれてしまう。イルムもインセクトオーダー改で斬りつけると言うよりは、まずは硬質な鱗を弾き飛ばすために刀身を叩きつけている状況だ。

周囲を見渡しても、殆どの獵人がイルムと同様の攻撃を加えている。大剣であれ、片手剣であれ、ハンマーであれ、斬撃だろうと打撃だろうと、刃が通らずに弾かれて踏躰たたらを踏んでいる者が溢れ返っている。唯一順調に攻撃を加えられている銃士でさえも、どれ程の効果があるのか判らない程に、巨像は殆ど反応を見せない。

そこでイルムは、先刻のような重量のある一撃——常人には出し得ない臂力を秘めた一撃をヴァーゼに依頼したのだが、彼は先刻の現象が嘘だったかのように、まるで重みを感じられない打撃を後ろ足に叩き込み続けている。——尤も、重みを感じられないと言っても、あくまで“先刻の一撃”と比較しての事で、現行の殴打や蹴り込みの威力も常人の域を遥かに凌駕している。

ヴァーゼは「もっとツ、熱くツ、なれよツ、ヘイツ、ヤアツ!!」と精神がヒートアップした様子で蹴り込み続けていたが、イルムの声に気づいて、「ンン!!? どうしたア!!? 限界破れそうかア!!?」と暑苦しい笑顔で親指を立てた拳を見せつけてきた。

「……いや、だからさ、何でさっきみたいな一撃打たないんだーって……」ノリに付いていけず、若干引き気味にイルム。

「あァん!? そりやおめエ、あんな限界超越秘技——タガはず“籬外し”が連続で使える訳ねエじゃんよ。双剣使いの“鬼人化”と似たようなモンだ」

——鬼人化。双剣使いが繰り出す、目にも留まらぬ斬撃の乱舞。それを可能にするのが、極限にまで挙動を高速化する“鬼人化”と呼ばれる状態だ。イルムも一介の双剣使いとして、一応扱える。だが一度使うと筋肉の疲労が著しく、連続で使えば暫くは動けなくなる程に体力を消耗する。

鬼人化すればそれに見合う攻撃を加える事が出来るが、同時に己

の体力を極端に消耗する諸刃の剣でもある。使い所を誤れば、カウンターで戦線離脱する事になるのは、火を見るよりも明らかだ。

「……てか、ちょっと待て。あんた、双剣使いでもないのに、“鬼人化”染みた事が出来るのかよ!?”」

高速で斬撃を繰り出す乱舞。これは双剣使いしか為し得ない特別な技法で行われる。自らの意思で肉体の限界を外すのだから、相應の訓練を受けても習得できない者も少なからずいる。しかもそれは、双剣使い以外では習得不可と呼ばれる秘技……一介の太刀使いが習得しているなど、まず有り得ないのだ。

「——もしかしてあんた、元は双剣使いだったのか……?」

だとしたら有り得ない話でもないのだが……そもそも鬼人化とは、武器の中でも一番軽量な双剣を高速で振り回す特殊な技能である。他の武器……次点で軽い片手剣ですら不可能なのだから、双剣以外で用いる事は出来ないのだ。

ヴァーゼのように鬼人化を殴打に用いる獵人など、この広い大陸でも聞いた事など一度としてない。

「いんやア。俺ア根っからの拳脚使いだぜ?」

「太刀使いでもなくて!?” 拳脚使いとか初めて聞くんだけど!?” その太刀は飾りか!?”」

「あ、これか?」背負っていた大長老の脇差に触れるヴァーゼ。「大長老の爺がくれてやるっ言うから貰っただけさ。正直、邪魔なんだけどな。あと、ギルドナイツの制服も」

大長老——ハンターズギルドの頂点に君臨する竜人の事である。彼から脇差を賜るなど、凄腕獵人は疎か、ギルドナイツでも稀少な存在に違いないのだが、受け取った獵人が悪かった。大長老を“爺”と呼称する辺り、懇意なのか無作法なのか、傍目には判らない。ギルドナイツの制服を何の躊躇も無く破り捨てる辺り、断然後者の気がするが。

「ヴァーゼ……おれっちはお前ほど破天荒な獵人を見た事ねーぜ……」

呆れるべきか、感心すべきか、イルムには判然としなかった。ヴァーゼの事を説明しろと言われたら、真っ先に思い浮かぶ単語が“異常者”、或いは“変人”だろうか。確かなのは、“獵人”と言うカテゴリーに納まる人物ではないと言う事だ。

「にゃーっ！！ 大タル爆弾G隊、出撃なのにゃー！！」

突如として響き渡るザレアの喊声に、全獵人が攻撃の手を止めた。焦燥に駆られながらも皆、同じ行為を始める。――災厄級の問題児を探す行為を。

イルムもその一人で、怯えながら視線を張り巡らせ――やがて、見つける。

ラオシャンロンの首に跨またがっているザレアの姿を。

「おま――――ッッ！？」思わず絶句するイルム。

「爆弾祭り、はーじまーるにゃー♪」

そう、ザレアが歓喜の声を上げた瞬間である。

岩外周部――エリア2に、鼓膜を破壊する爆音が轟いたのは。

エリア2を席巻せっけんする爆風に殆どの獵人が蹲すくって衝撃に耐えたのは奇跡と言って良いだろう。爆発と共に地上を転がる獵人も数人いたが、幸い擦り傷程度で済んでいた。

爆心地は――ラオシャンロンの足許。地面を力強く踏み締めた瞬間、地面の底から爆発が巻き起こり、前足を爆炎が舐めていく。立ち上がる火柱と共に、ラオシャンロンは「グオオオオッ！？」と悲鳴を上げ、思わず上体が一瞬だけ浮き上がる程に怯む。

ラオシャンロンは驚きながらも今度は左の前足を前進させ――再び爆発が巻き起こり、前足を火柱が穿うがつ。「ギャオオオオ！？」と堪らず絶叫するラオシャンロン。

そこで一旦、動きが固まった。表情の機微はよく判らないが、イルムには何故か、ラオシャンロンが涙目になっている気がして仕方なかった。もうこれ以上進みたくない……そんな意志が垣間見えた気がした。

「ラオシャンロン、ゴーっにゃー！ 爆弾祭りは始まったばかりにゃ

よっ!!」

最悪の祭典を催しているネコ頭は、楽しげにラオシャンロンの首を叩いている。それはまるで、馬になった父親に跨る子供が、父親に火の海を進めと命令しているように映った。

“悪魔だ”——その場に居合わせた獵人は皆その瞬間だけ、心を通じ合わせたと言う。

ラオシャンロンは前進する事を物すごく躊躇した後、今度は右の後ろ足を前に進め——火柱が上がり、三度目の喚声が弾けた。

「も、もう止めてあげてッ!? ラオシャンロンが、ラオシャンロンが可哀想だよッ!」

涙目で泣訴するイルム。それは、その場に居合わせた全獵人の心の声を代弁したものだった。

ザレアは「ど、どうしてそんなに事を言うのにゃ!? 爆弾祭りは今、始まったばかりなのにゃよ!?」と、物凄く切なそうな声で応じる。

その声に反応するように、ラオシャンロンは怯えながらも今度は左の後ろ足を進め——非情な爆発が後ろ足を襲う!

「ギャアアアアアオオオオオオオ——————ッッ!!」

「ラオシャンロンの体力はもうゼロだよ————ッッ!!」

イルムの絶叫が、エリア2に響き渡る。

その痛々しい喚声に、一人の青年が動いた。

ぼん、と。優しくイルムの肩に手を置いたフンドシの青年は、彼に笑いかける。

イルムはその慈悲深い微笑を見て、“救われる”——そんな儚い幻想を懐いてしまった。

青年は、非情な祭りを開催する主催者へと顔を向け、とても穏やかな表情で告げた。

「——ザレア。ヒロユキを——突っ込ませよう」

イルムはその時、晴れ晴れとした微笑を浮かべていたと言う。

——ああ、トドメを刺すんですね♪

会心の笑顔が浮かんだその頬を、一滴の涙が伝う。

0104. 爆弾祭り（後書き）

次話にて【ザレアとヒロユキ】の物語は完結になります。

現時点で相当酷い事になっていますが、結末は果たして？

それでは、次話をお楽しみに♪

0105. 伝説と初恋（前書き）

【ザレアとヒロユキ】の完結編をここにお送り致します^^

それでは、本編をどうぞ♪

0105. 伝説と初恋

「嫌にゃーッ！！ 絶対に、絶対にヒロユキは渡さないのにゃーッ！！」

ラオシャンロンが前進を再開せずに彼は五分が過ぎた頃。ザレアが対巨龍爆弾“ヒロユキ”を抱き締めて五分ほど経過した。

「ドルア！！ 我儘^{ワガママ}言うんじゃないありません！！ 母さん怒りますよ！！？」

フンドシをはためかせつつ、腕を組んで仁王立ちのまま般若^{ハンニャ}の形相で怒号を張り上げるヴァーゼ。

「いつからザレアの母さんになったんだよ！？ あんた、見るからに“漢”^{おとし}じゃねえか！！」

至極真つ当なツツコミをぶつけるイルム。

「ヒロユキは……ヒロユキは渡さないのにゃー！！」

ヒロユキを抱き締めたまま、〈アイルーフェイク〉をブンブン振り回すザレア。それが掠^{かす}ただけで大爆発を起こすのではないかと思っっている周囲の獵人達は、怯えながら外周部の端で縮こまっている。中には「や、止めてくれーっ、ここで爆発だけは止めてくれーっ！」と泣き喚いている者もいる。

駄^こ々を捏ねるザレアに、イルムはどうしたものかと腕を組む。と言うか、もうこれ以上ラオシャンロンに攻撃を加える必要は無いのではないかと思う。巨像を見るに、もう怯えきって一歩たりとも前に進もうとしない。尤も、引き返すには図体がでか過ぎてUターンも許されないため、その場に硬直しているだけかも知れないが……

「ザレア」す、と前に出たのは言うまでも無くヴァーゼである。「俺の話を、聞いてくれるか……？」

いつに無く真剣な表情のヴァーゼ。その声音に気づいたのだろう、ザレアは〈アイルーフェイク〉の正面をヴァーゼに向け「……にゃ？」と上目遣いに小首を傾げる。流石に〈アイルーフェイク〉に上

目遣いをされても何も感じないが。

ヴァーゼはザレアの前に跪き、ゆっくりとヒロユキの方へ視線を投げる。

「……俺にゃアな、ヒロユキの声が聞こえてきてんだが……ザレア。手前は、違うのかよ……？」

「ヒロユキの、声……にゃ？」

ンな馬鹿な、とツツコミを入れるにはあまりに空気がシリアスなので、イルムは口を噤んだまま、二人の様子を見守る。

ザレアがキョトンとしてヴァーゼを見つめていると、彼はふつ、と柔らかな微笑を滲ませ、ヒロユキの横腹を叩いた。全員がその挙動にビクリと体を震わせるが、幸い、爆発は起こらなかった。

「こいつア……とんだバカヤロウだぜ。もう、今か今かと、奴を吹っ飛ばす機会を窺ってやがる」どこか遠い眼差しで呟くヴァーゼ。その独白は更に続いた。「この熱いパトスを、手前が聞こえてねエ筈がねエだろ？——ザレア」

ヴァーゼの澄ました表情で語られる妄想に、イルムは全身を真っ白にして聞いていた。本当に逝っちゃってる人間って、間近で見ると恥ずかしいを通り越してもうどうしようもなくなるんだな、と悟りの境地に達しようとしていた。

対するザレアは、何故か〈アイルーフエイク〉の瞳が見開いたかのような錯覚と共に、バツと即座にヒロユキに向き直り、やがて静かに震えだした。

「ヒロユキ……オイラが、オイラが間違っていたのにゃ!! ごめんにゃ、ヒロユキ!! オイラ、オイラ……ッ!!」

何か通じてるーっ! と言うツツコミを脳内で入れるイルム。現実では真っ白のままだが。

ザレアはヒロユキに抱きついて落涙（しているように見える）すると、やがて一滴の涙も流れていない〈アイルーフエイク〉の目許を腕で乱暴にごしごしと擦り、ヴァーゼに向き直った。

「オイラ……ヒロユキと一緒に……——行くにゃ」

その表情は「アイルーフェイク」で視認できなかったが、何故だろう——「アイルーフェイク」が誇らしげな表情を浮かべているように、輝いて映った。

ザレアが誇らしげに敬礼をすると、ヴァーゼも澄んだ表情で敬礼を返す。

「……ヒロユキ、ヒロユキ、」

ふと、どこからともなくコールと共に拍手が始まる。

「ヒロユキっ、ヒロユキっ！」

隣の者から、その隣の者へ、そして更に隣の者へと、まるで波のように伝播する拍手と“ヒロユキコール”にエリア2は埋め尽くされていく。

その中心にいるザレアとヴァーゼ、そしてイルムは、自らを包み込む拍手と“ヒロユキコール”に爽やかな微笑を返し、——敬礼を返した。

「ヒロユキッ！！ ヒーロユキッ！！」

エリア2を包み込む喚声は、徐々に、そして確実に、大きくなっていく——

やがて、“ヒロユキコール”が絶頂を迎えようとする頃。三人の獵人とヒロユキは、エリア2に架けられた石橋の上に立っていた。地上三十メートル程の高さにある石橋。その下には、丁度ラオシャンロンの背中が見える。

「それじゃ——行ってくるにや、皆！！」

ビシッと敬礼をするザレア。彼女を止める障害は何一つとして無い。皆、彼女の背中を押しているのだ。ヴァーゼも、イルムも、爽やかな笑顔でその背中を見つめている。

「——イルム」

空気に流されるだけ流されて、「おれっち、なあにやってんだろーなー」とふと心の底で自分の行為に疑念を感じたイルムに、隣から声が掛けられた。貼り付いたままになっている微笑のまま振り向

くと、似たように爽やかな微笑を浮かべているヴァーゼと目が合う。

「ザレアを……頼んだぜ？」

「おう、任せと……何？」

ザレアが、ラオシャンロンの中に向かつて飛び降りるのと同時に、何故かイルムの体も宙を舞っていた。背中に感じた軽い衝撃——ヴァーゼの手が伸びていた事を落ちながら知り、思わず両眼を掻く。

「ちょッ、何でおれっちまで——ッッ！？」

数瞬の滞空時間が過ぎ去り、尻からラオシャンロンの背中に着地するイルム。「いつづアッ」と思わず痛みに呻き声を発し、臀部を押さえて蹲る。隣では三回転捻りに加えて頭の上にヒロユキを載せて着地に成功するザレア。

「よいしょっにゃ！」

とん、と頭の上に載せていたヒロユキをラオシャンロンの背中に設置するザレア。何故かへアイルーフェイクの無機質な猫顔が達成感に充ち満ちている気がして仕方ないイルム。

それで脱出するのかと思いきや、ザレアはその場に胡坐を掻いてヒロユキと相対する。イルムは徐々に痛みが和らいできた臀部から手を離し、そろりそろりとザレアから離れていく。

「——イルム君」

ビクツと体が震える。まるで悪事が露呈した悪ガキになった気分である。そろりと振り返ると、ザレアはヒロユキを見つめたまま動いていない。気配だけで察したのだろうか。

「オイラの初恋……見届けて欲しいのにゃ」

最早、理解不能を跳び越えて危険領域に達している。イルムはゴクリと唾を嚥下した。このままここにいれば、確実に自分は死ぬ……ラオシャンロンやシェンガオレンを撃退するために造られた特注の爆弾——対巨龍爆弾の威力がどれ程のモノか判らないが、一つ言える事は大タル爆弾Gの比ではないだろうと言う事。そんな爆発に巻き込まれたら、大怪我で済む筈が無いと断言できる。

彼女の我儘に付き合っただけ死ぬのか。それとも彼女を見捨てて自分だけ生き残るのか。或いは彼女の意志を殺してヒロユキから引き剥がして一緒に脱出するのか。

イルムは一つ、——頷いた。

「——おう、分かった」

ザレアの元まで中腰で歩み寄り、やがてヒロユキの眼前で胡坐を掻く。その行為に、ザレアは驚いたようだが、やがてへアイルーフエイクに笑顔が宿ったような気がした。

彼女は——古龍迎撃戦で明らかに浮いていた自分に声を掛けてくれた、奇特新人だ。奇特ってモンじゃない。明らかに異常者の領域に分類される新人だった。それでも——純粹に嬉しかったのだ。その時の事を思い出したイルムは、彼女と共に散るのなら、それはそれで良いかも知れない、と思っってしまった。

下方では、相変わらず“ヒロユキコール”と拍手が沸き起こっている。それももう、終わりが近づいているのだろう。コールと拍手は加速し、ただの喚き声と化している。

「イルム君。……ありがとにゃ」

「いや、気にするなよ。おれっちも……ザレアに出逢えて、良かった」

そう、微笑みかけた瞬間だった。

視界が、閃光の濁流に呑み込まれたのは。

「——おお!! ラオシャンロンが引き返していくぞーッ!!」

……遠くから、喚声が聞こえる。

酷く現実感の湧かない台詞だ、と感じた。あの、彷徨う災厄さいあくと呼称される古龍の一種であるラオシャンロン。それが、新人とは言え矮小なる人間に撃退されるなど……にわ俄かには信じ難い話だ。

しかし、ずうん……ずうん……と、鳴動する大地から伝わる巨像の足踏みは、徐々に遠ざかっていく。本当に……成し遂げたのか。良かった、と思った。自分の命と引き換えに砦を死守できたのだ。

これほど名誉な事は無い。村の皆にも、胸を張って言える。「自分は、ラオシャンロン撃退を成し遂げたのだ」――と。

まだやり残した事はある。未練も山ほど残っていたが、ここで眠りに就くのも悪くないな――と思った。しかし、どうにも体が重い。全身が痛む。と言うか頬を幾度と無く打たれている気がする。

「いでででイ！！ 何！？ 地獄！？ 打たれ地獄なのここは！？」

「あ、起きたにゃ」「よう、目覚めたか英雄！」

飛び起きて頬を摩さすっていると、眼前には見覚えのある二人組。そして、泣きそうな顔で後退しているラオシャンロンの巨像。

何が起きているのか解らずにフンドシー丁の青年に視線を転ずると、彼は快活な笑顔と共にイルムの肩を叩いた。

「ラオシャンロン迎撃戦、無事に成功したぜ！」

「……いや、そうじゃなくてさ。何でおれっち……生きてるの！？」

確実に対巨龍爆弾“ヒロユキ”の爆心地にいたイルム。爆発が直撃したのだから、死んでいなければおかしい――仮にヒロユキの威力が弱かったのだとしたら、今度はラオシャンロンが撤退する現在の映像が虚構になってしまう。

訳が判らないと言った様子でヴァーゼを見つめていたイルムだったが、そこに二匹の獣人族が地面から突然飛び出してきた。飛び出た場所がイルムの眼前だったため、「うわっ、何だッ！？」と驚いてたじろぐイルム。

「ニヤニヤッ！ そこは我ら“爆造のロージヨ”のお手伝いネコが説明するニヤ！」飛び跳ねながらアイルー。

「対巨龍爆弾……あれは古龍だけに効果がある爆弾ニヤ！ 人間にはニヤんと無害なのニヤー！」同じく飛び跳ねながらメラルー。

「え……って無茶苦茶な設定の爆弾だなおい」どうツツコミを入れるべきか悩むイルム。

「お陰でオイラもピンピンしてるのにゃ！ 流石は“爆造のロージヨ”の特注品……最高なのにな！」

嬉々として“爆造のロージョ”のお手伝いネコと手を繋ぐザレア。一人と二匹（と言うか三匹）は輪になって「にゃーにゃー」言いながら踊り始める。

それを呆然と見つめていたイルムだったが、何だか考えるのが馬鹿らしくなり、思わず口から笑声が零れた。

久方振りに出る心底からの笑みに、イルムは暫し時を忘れて大笑した。

ラオシャンロンが器用にバックで去って行った後。ローグ砦では撃退成功を肴に宴が開催された。

その中でイルムは二人の獵人の姿を探していたが、どこに行っても見つける事は叶わなかった。

あんな獵人には、未だかつて出逢った事が無い。だからこそ、彼らともう少しだけ時間を共有したかったのだが……もう、ローグ砦に二人の姿は無かった。

幻だったのか。――否。彼らは、この場に居合わせた獵人全員の心に深く刻み込まれている。彼らを忘れる事など、不可能だ。それほどまでに鮮烈に光り輝く獵人だったのだから。

――やがて、その物語は大陸を席卷する。……が、誰もその話を信じなかった。

曰く、フンドシー丁の獵人が、拳でラオシャンロンの頭を地中に沈めた。

曰く、〈アイルーフェイク〉だけの獵人が、砦を地雷原にし、ラオシャンロンの侵攻を止めた。

曰く――その二人の獵人の攻撃を素手で止める獵人がいた。

誰も信じ得ぬその伝説は――今も、大陸の随所で語られる、有名にも程がある御伽噺となった。

辺境にある村。雪に閉ざされた寒村に、一人の行商人が訪れた。
「ちはゝ、行商人のウエズっすゝ」

酒場の戸を抜けて現れた青年に、双剣使いの猟人が「おう、久しぶりだな、ウェズ」と樽のジョッキを掲げて応じる。

「よっ、イルム。景気はどうだい？　僕の厳選された道具が必要なんじゃないかい？」

「景気は悪くねえな。そうだなあ……っと、そうだ。カクサンデメキン売ってくれよ。そろそろ在庫が尽きそうなんだよ」

イルムが苦笑混じりに応じると、ウェズは「あ、悪いな」と言っ
て手を合わせた。

「お？　無いのか？　お前いつも在庫が有り余ってるから買ってくれて言う程なのに」

「それがさ、これまた辺境の村に変わった奴がいてさ。へアイルーフェイクしか被ってない、爆弾使いの女の子なんだけどね」

「――何？　もしかしてそいつ、ザレアって言っくんじゃ……」

「え？　知ってるのか？」

ウェズが驚いたように反応すると、イルムも同様に驚いたような表情を浮かべ、やがてそれは崩れて笑みになった。

「――ああ。あいつはおれっちの――」

そこまで言っ
て、口を噤むイルム。次に出た言葉は、彼の本当の想いとは違うが、嘘でも無い言葉――

「――大事な……狩友さ」

彼女はまだ、伝説の世界で生きているのだろう。だったら自分は――遠く離れた地で見守っていた方がいい。

彼女に見初められたら――もう、マトモな人生が送れなくなるよ
うな、そんな気がして……………

イルムは苦笑に似た笑みを浮かべるのだった。

EX1【ザレアとヒロユキ】――【了】

0105. 伝説と初恋（後書き）

対巨龍爆弾の設定が一番ファンタジーですw

これにて【ザレアとヒロユキ】の物語は完結と相成ります♪

次話からは【0201. 風邪引き少女の見る夢】の後に公開していきます^^

次話は【ザレアのヘアイルーフエイク】が脱げる【物語ですw
それでは、次話をお楽しみに♪

0201. 風邪引き少女の見る夢（前書き）

急遽、ヴァレンタインに合わせてリクエスト第二段、“ベルとフォアン”をイメージして綴った物を公開させて頂きます。

個人的には甘々い物語だと感じたので、ヴァレンタインに丁度良い
と思い、先行公開に踏み切りましたw

※狩猟は一切ありません。

では、本編をどうぞ♪

0201. 風邪引き少女の見る夢

暖かいを通り越して茹だるような暑さを提供していた温暖期が徐々に鳴りを潜め、寒冷期が訪れようとする頃。ラウト村にある、小屋にしか見えない家屋の中で、一人の少女が寝台ベッドに潜り込んでグツタリとしていた。

ラウト村の専属獵人ハンター——ベルフィーユこと、ベルである。彼女は苦しそうな表情のまま、ぼんやりと天井を見上げていた。時折吐き出される咳には、感冒と思しき色が糊塗ことされている。顔を熱で赤く染め、「……ふう、」と溜息こぼを零す。

「……風邪ね、絶対……」

自己の体調管理に自信を持っていた訳ではないが、獵人として修行を始めた頃から、一度として体調を崩した事が無かったベルは、現在の自分の状態に軽い衝撃を受けていた。体温は測るまでも無く、微熱の域を超えているだろう。全身を包む倦怠感けんたいかんのせいで、確認する気力すら湧かない。

「ん……」

寝台から出ようにも、体が思うように動かない。頭痛が酷く、吐き気も若干する。今はじっとして眠っていた方がいだろう……そう結論を出し、ベルは今一度眠りの世界に身を委ねゆだねようとして——

「——ベル？」

こんこんっ、と叩扉ノックする音と共に、ラウト村唯一の少年獵人——フォアンの声が部屋に飛び込んできた。ベルがぼんやりとしたまま戸を見つめると、戸の隙間から覗うかがえる外の光が、一人分の影で陰っているのが見えた。

「もう昼になるぜ？　いつまで寝てるんだ？」

淡々とした声。今日も連日行っていた採取と間引きの依頼こなを熟すため、酒場でベルの到着を待っていたのだろう。今日に限って中々やって来ないものだから、心配になって見に来た——と言った所だ

ろうか。ベルは怠さで掠れそうになる喉を震わせ、「うー……」と言葉にならない声を戸越しに返す。

「……ベル？　――入るぞ」

返事になっていない呻き声を聞きつけ、戸を開け放つフォアン。彼はベルの部屋に躊躇無く侵入を果たすと、寝台に横たわっているベルの元まで歩み寄り――その表情を若干驚きに染める。

「――具合、悪いんだな？」

即座にベルの状態を把握したフォアンは、ベルの額に手を当て、軽く熱を測ると、窓に掛かっていたカーテンと同時に窓を開け放ち、換気をする。温暖期から寒冷期へ移行する間の清涼な空気が部屋に入り込む。

「ごめん……今日の依頼は無理みたい……」

蚊の鳴くような声で呟きを落とすベル。いつもの活気は無く、どこか弱々しい声調に、フォアンは軽く微笑を滲ませると、ぽんぽんと弱くベルの額を撫でる。

「今日は一日安静に、な？　偶には休息だって必要さ。――ちよつと待っててくれ、必要なモノを用意してくる」

ベルに柔らかな微笑を見せると、フォアンは部屋を立ち去った。優しい態度で接してくれたフォアンを見て、妙に安堵してしまったベルは、そのまま眠りの世界に埋没していった……

「……………ル、……………ベル……………」

意識の外から響いてくる馴染みのある声に、ベルは緩慢な動きで瞼を開ける。意識が外に向かうと同時に、全身の熱っぽさが増したような気がする。

声を発せずに視線を向けると、朧気にフォアンの姿が映り込んだ。

「……………？」視線で何か用か尋ねるベル。

「悪い、もう少し早く起こしに来れば良かった……」

表情を陰しくして嘆息するフォアン。いつもの彼らしくない神妙な表情に、ベルは何が起こっているのかよく判らず、掠れた声で疑

問を投げる。

「……何か……あった、の……？　コホコホ」

「それがな……ザレアは緊急で行われる事になった獣人族の集いに出席、ティアリイとコニカも臨時で開かれる事になった会合に参加、アネさんはその護衛で……要するに、村の皆が出払ってるんだ」

フォアンの話によると、本当につきさまで全員、揃っていたのだが、各々の用事のために、フォアンが酒場に戻った頃には皆、出掛けてしまっていたらしい。酒場に辿り着いたフォアンが見たのは、各々が用事で出掛ける旨が記された置き手紙だけだった。

「……タイミング、悪かったわね……」

ベルは自分の不運ぶりに重い嘆息を漏らす。ティアリイやコニカがいれば、薬を処方して貰えただろうに、それすら不可能になってしまった。

「だから、今日は俺が全力でベルを看護するからな」

とんとと自分の胸を叩いて自信有り気に微笑むフォアン。ベルはどこか不安そうに彼の顔を覗き込むが、彼は意に介さず固めた拳で親指を立てて応じる。

（……果てし無く不安だわ……）

酒場に置いてあった椅子を持ってきて、ベルが横たわる寝台の隣に置き、そこに腰掛けるフォアン。手には氷樹リングとフルーツナイフが握られている。

その姿を寝台に横たわったまま見つめたベルは、咳と共に声を掛けた。

「ケホッコホッ、……ねえ、フォアン。もしかしてあんた……」

「リングを切ろうと思うんだが、何の形にして欲しい？」

どうやらリングを動物などの形に切ってくれるらしい。

フォアンにそんな器用な真似が出来ると知らなかったベルは、感心と驚きを半々にした表情を浮かべつつも、取り敢えず聞いてみた。

「……えっと……ケホッ……どんな奴が作れるの……？」

「そうだな。リオレウスとか、イヤクックとか、あとダイミヨウザザミとか」

「ただだけ器用なの！？　ゲゴゴホッ！！　それ作れたらもう芸術の域じゃない！？　ゲーゴゴゴホッ！！」

「ほら、落ち着けてベル。そんなに慌てなくても、ちゃんと作ってやるから」

背中を摩りつつ、宥めるように声を掛けるフォアンに、妙に恥ずかしくなりつつ、ベルは咳を納めると、「それじゃ……リオレウス、作ってみてよ」と要求した。

「了解だぜ」

と、言うが早いか、素早く氷樹リングをカッティングしていき、やがて十秒と経たずにリオレウスが完成した。

「ほら、完成したぜ？」

「天才！？　天才なの！？　ゲッホゴッホッ！！」

「落ち着けてベル。今、食べさせてやるから」

氷樹リングで出来たミニサイズのリオレウスを竹の楊枝ようじに突き刺し、ベルの口許に運ぶフォアン。

「ちよちよっ、自分で食べられるからっ！」　頭を後ろに下げて、頬を紅潮させるベル。

「ほら、あーん」

「だから……ッ！！」

「あーん」

有無を言わさぬフォアンに、ベルは顔を真っ赤にさせつつ、根負けして「あ、あーん……」と口を開け、氷樹リングを口に納める。

冷たく冷えたリングが、口の中の熱を溶かしていく。仄かな甘みと、氷樹リングの蓄えた水分が、熱っぽい体を癒していく。

「どうだ、美味しいか？」

爽やかな微笑と共に声を掛けてくるフォアンに、ベルは頬を紅潮させたまま、即座には言葉を返せない。

「……あのね、フォアン……もう恥ずかし過ぎて、味もへったくれ

も無いんだけど……」

「よし分かった、次は何を作って欲しい？」

「お願いッ、人の話を聞いてッ!? ゲヘゴホッ!! これ以上恥ずかしい目に遭うと、熱暴走だけじゃ済まない気がするのッ!! ガハゲホッ!!」

「熱暴走……? なら氷属性がいいな。待ってろ、今、ドドブランゴ作ってやるから」

「あたしの話を聞けエエエ————ッッ!! ゴーッホゲホゲホッ!!」

「ほら、落ち着けてベル。今は安静に、な？」

「……誰のせいで落ち着けなくなってると思ってるの……? ケホケホ」

「ほら、出来たぞ、ドドブランゴ。あーん」

「……………」

ベルは、諦めを、覚えた!

散々恥ずかしい目に遭わされ、心身共に疲弊しきったベルは、熱のせいでぼんやりと歪む視界にフォアンを納めていた。彼は今、氷樹リングをカッティングする仕事を終え、今度は小さな樽の容器に雪解け水を入れ、中に浸していたお絞りを取り出すと、ベルの額に載せる。ひんやりと冷気を纏った布が、頭をじんわりと冷やしていく。

「ああ……ありがと、フォアン。気持ち良いわ」

まるで溶けてしまいそうな緩みきった表情で謝意を告げるベル。正直、先刻の事があったので、マトモな看護にありつけないと思っていたのだが、どうやら思い違いだったようだ。

「そうだ、ベル。汗、掻いてるんじゃないか？」

熱に浮かされた頭に響くフォアンの声に、ベルはふやけたような表情で小さく応じる。

「ん……確かに、掻いてるかも……」

「だったら着替えないとな。汗も拭いてやろう」

「んゝ……じゃあ……お願い……」

胡乱な頭で生返事を返すベル。暫くして背中に手を回され、無理矢理起こされて始めて、ベルは意識を取り戻した。眼前にはフォアの顔。何故か彼は彼女の寝間着のシャツに手を掛けている。

「――ッッッ!? ちょちょッ、何!? 何をするつもりなの!」

体の自由が利かないベルを万歳させ、シャツをするすると脱がしていくフォアンは、「ん?」と上半身を曝け出す彼女を見て告げる。
「着替えと、汗拭きだが?」

「いいッ!? いやッ、それは自分でやるからッ、スーパー恥ずかしいんだけどッ!」

「まあそう言うなって。今日は俺が看護するんだからさ」

妙に格好良い表情で笑むフォアン。彼は何故だか解らないが、不思議な使命感に囚われている気がして仕方ない。と言うか既に色々手遅れだった。ベルの上半身は既に裸体を晒している。

顔を真っ赤にして、もうどうでも良くなりつつあるベル。熱に浮かされた頭では、正常な思考が出来ない。

「あゝ……うん、それじゃあ、お願いしようかな……」

視界が歪む。そこに映るフォアンは、まるで天使のような微笑を浮かべて、タオルを手にベルの体を丹念に拭き始める。それがまるで現実味の無い、虚構の世界の映像のようで、ベルは映画でも見ている気分で、その光景を視野に納めていた。

やがて拭き終わったのか、新しいシャツを着せられ、再び寝台に寝かされるベル。その時になって若干意識が復活したが、すぐに現実を許容できなくなり、彼女は再び微睡みの世界に埋没していく……

熱のこもった世界で、ベルは走り彷徨ウロウロっていた。周囲に見える風景は、樹木の海。村より標高の高い山林の中を、彼女は直走ひたはしっている。時刻は夕暮れを疾とうに越え、山林は闇に沈んでいる。自分の呼

気と心音だけが木霊する世界。目許には激情の雫が溜まり、風を受けてパラパラと宙に散っている。

ベルの顔は、恐怖に歪んでいた。何に追われているのか判然としないが、背後を振り返る事すら儘ならない。振り返ればそこに恐怖の根源があるような気がして……

地面は昨夜降り注いだ雨のせいで泥濘ぬかるみと化し、幾度と無く足を取られて転倒したため、ベルの体は全身泥だらけになっていた。荒く酸素を補給しようと口を開く度に、不快な泥水の味が口腔こうくうに広がる。そんな事にも構えない程、彼女の精神は逼迫ひっぱくしていた。

どれだけ走っただろうか。もう、村は見えなくなっただろう。この辺は、自分の足では来た事の無い、未知の領域。それは詰まり――モンスターモンスターの領域に足を踏み入れた可能性がある。

武器を持たず、腕力も無い女兒の力など高が知れている。集団で狩りをするランポスの領域に踏み入ろうものなら、物の五分と掛からずに餌食となるのは火を見るよりも明らかだ。大の大人と共に山越えをする時でさえ、獵人の力無しでは難しいと言うのに、たった一人の女兒が装備も整えずに山林を駆け抜けるのは、自殺行為以外の何物でもない。

「……っ、……………っ」

村を出る直前、親に言われた言葉を頭の中で反芻はんすうする。「絶対に声を出してはいけない」、「絶対に振り返ってはいけない」、「絶対に――誰も憎んではいけない」……その言いつけを恭順に守り、彼女は終わりの見えないかけっこを続ける。

――遠くの森で、モンスターの咆哮が弾けた。

ベルは体をビクリと震わせ、悲鳴を上げそうになる口を慌てて両手で押さえた。目許に溜まった激情の雫は止め処なく流れ落ちる。既に神経が擦り切れそうになっている彼女は、悲鳴と共に吐き出しそうになった胃袋の内容物を喉元で押さえ留め、しゃくり上げながら再び走り出す。

がさ、――と。近くの茂みが不自然な音を奏でた。

ベルが思わず体を強張らせると、いつの間にか音源へと視線を向けていた。そこには――巨大な影が――

「――――ッッ」

布団を跳ねのけ、ベルは荒い呼気を吐きながら跳び起きた。涙が止め処なく頬を伝い、心音が煩い程に掻き鳴っている。視界に映る、慣れ親しんだ自室の映像が巧く脳髓にまで届かない。現実世界が虚構にしか映らない状況で、ベルは喉に痞^{つか}えていた胃液を思わず吐き出す。口の中と鼻の中に酸っぱい臭いが立ち込め、その醜悪な臭気に更なる吐き気を催す。

「――落ち着け、ベル」

吐き出した内容物を、咄嗟に小ダルで受け止める誰かの手。それが誰の手なのか判らず、ベルは再び胃の内容物を吐瀉^{としゃ}する。先刻食した氷樹リンゴの欠片と、胃液。それが全てだった。何度も吐き出し、やがて喉を胃液が通過した事によって痛みを発し始めた頃、ようやく嘔吐感は納まり、その間ずっと背中を摩っていた少年に凭^{もた}れかかる。

くた、と力の抜けきった表情で、ベルは少年に抱きついた。涙が止め処なく溢れてくる。ここが現実だと何度自分に言い聞かせても、本能は感情に忠実だった。恐怖が生み出した最悪の映像が、何度と無く脳裏で再生される。

あれは――あれこそが、虚構。ベルは一度としてモンスターに遭遇する事無く、山を越えたのだ。だからこそ、今もこうして生きていられる。師匠に拾われ、フォアンやザレアに逢う事が出来た。だから先刻の夢は――全部、虚妄^{きやもう}なのだ。

夢の内容を知る筈が無い少年は、優しくベルを抱き留め、背中を何度も摩る。母親が子供をあやすように、優しく、ゆっくりと。

「俺はここにいる。だから大丈夫だ。俺はここにいるぞ」

何度も、ただその事実を彼女の本能が認めるまで、辛抱強く囁き続ける。

やがて激情の波が引いた後も、落涙は中々納まらなかった。ここに彼がいる。それだけで、どうしようもなく温かな気持ちになれる――その気持ちを再確認して、安堵の感情が雫となっていた……

「……ごめん、取り乱したわ」

心が冷静を取り戻した後、ベルは再び布団に潜り込み、フォアンに背を向けた。今は恥ずかしくて彼の顔を直視する事が出来なかった。フォアンは椅子に腰掛けたまま、涼しげな微笑を浮かべる。

「気にするな。誰だって怖い夢を見たらそうなるさ」

「……そう……かな？」

怖い夢。確かに、先刻の夢はベルの中に眠る最悪の想像が具現化したような映像だった。現実には起こらなかった事態とは言え、あれが実際に起こっていたら……今、自分はここにはいない。確実にあの時、命を落としていた筈だ。

そんな最悪の事態を思い浮かべるだけで、ベルの肝は冷えていく。獵人となった今でも、モンスターに対する恐怖心が和らがないのは、克明な最悪の想像が容易く脳裏に蘇るためだろう。

「……ねえ、フォアン」

背を向けたまま、ポツリと言を零すベル。フォアンの表情は見えないが、彼はいつもどおり落ち着いた双眸でこちらを見つめているだろう。

「……手、握ってくれない？」

ひょこ、と布団の中から出てくるベルの左手。フォアンはその手を何の躊躇も無く握り締めた。ベルの熱っぽい左手に、ひんやりとしたフォアンの手が触れる。

「これでいいか？」

「……うん、ありがと」

顔を向けず、ただ言葉だけ返して、ベルは瞼を閉じた。

彼が手を握ってくれているだけで、何故か今度の夢見は良いような気がした。

「べっ、ベルしゃんっ、大丈夫なのにやっ!？」

「お、お加減は如何ですかっ!？」

「んもうっ、風邪なら風邪って言ってよおんっ。あちし、心配したじゃないっ」

突如としてベルの自室に鳴り響いた三人分の声。だが、その声に対する返答は無かった。

部屋の中を視認した一同に、ティアリーが人差し指を口唇に当て、静かな声調で告げる。

「今はそっとしておきましょう？　きつと——幸せな夢を見ている筈ですから♪」

そう言うのと、扉を音も無く閉めるティアリー。

部屋の中では、二人の少年少女が規則的な寝息を立てて眠っていた。

少女は少年の手を握り、とても幸せそうな表情で、温かい夢の世界に旅立っている。

少年は少女に手を握られ、その腹に頭を乗せて、これまた幸せそうな表情で眠りこけていた。

——翌日、その事を弁解する少女の喚声が酒場で弾けるのだが、それはまた、別の話——

EX2 【ベルとフォアン】——【完】

0201. 風邪引き少女の見る夢（後書き）

今回は一話に綺麗に纏まったので、これにて完結です。

もう・・・モンハン全く関係ありませんね！（開き直り

※それがPクオリティ。

ではでは、次話をお楽しみに♪

※次話から割り込み投稿にて、この物語の手前に“ザレアとヒロユキ”の物語を更新していく予定です。

0301. その禁忌、暴くべからず〈前編〉（前書き）

リクエスト第3弾【ザレアの〈アイルーフエイク〉が脱げる】物語
をここにお送り致します♪

0301. その禁忌、暴くべからず〈前編〉

麗らかな陽射しが照りつける昼日中。ラウト村の三人の専属獵人^{ハンター}は農場へと繰り出し、せっせと畑に植えていた怪力の種を収穫している。この光景を見ただけで卒倒しかねない苦労人であり行商人のウェズが近日来訪する予定なので、今の内にと収穫作業に勤しんでいる次第である。

「……ねえ、フォアン」

大量の赤色の種を籠^{カゴ}の中に入れて持って来たベルは、中腰になって収穫作業に勤しんでいた少年——フォアンへと声を掛けた。彼は麦藁帽子を取って頭を掻き掻き、同じ格好の少女に振り返る。

「どうした？　今回も大量過ぎて籠が足りないのか？」

「そうなのよ、ぐへへ……って、そうじゃなくて……あのさ、唐突^{タツ}だけど……ザレアの素顔、気にならない？」

農場の樹木に止まっている小鳥が囀^{さえず}る歌声が聞こえる、麗らかな昼下がり。フォアンは照りつける陽射しの元、爽やかな微笑を湛^{たた}えている。

それに相対するベルも、似たような爽やかな微笑を浮かべて、彼の顔を見つめている。

「……止めとけ、命が幾ら有っても足りないぞ」ぼん、とベルの肩を叩くフォアン。

「禁忌^{タブー}！？　禁忌なの！？」思わずツツコミを入れるベル。

「俺はパスしたい。ザレアだってそんな事、望んでいないと思う」

「で、でも……隠されると余計に暴^{あは}きたくならない？」えへ、とベル。

「流石^{さすが}ベル、性格が良いな」ニッコリ笑顔でフォアン。

「そんな、褒めなくていいわよ！」照れてフォアンの顔を殴るベル。ベルに殴られた頬を撫でると、フォアンは腕を組んで唸^{うな}り始めた。「まあ、俺も気にならない訳じゃないんだけどね」

「でしょ!？ あたしが思うに、ザレアって絶対に美少女だよ! 一度でいいから見てみたいじゃない♪」

「俺が思うに、ザレアの顔には深い傷が有って、それを隠しているんじゃないかって睨^{にら}んでるんだけどなあ」

ベルがウキウキしながら告げると、フォアンも何だかんだ言いつつ自分の結論を述べる。二人は顔を見合わせると、――不意に悪巧みを表面に刷^はいた悪戯っ子の顔になる。

「力を合わせて、何とかザレアの素顔を見るわよ!」

「許せザレア、これも隊長の下知^{げち}なんだ……」

「ニヤニヤっ、ベルお嬢様、フォアンお坊ちゃま、ボクに何か用かニヤ?」

農場の隅に呼び出したのは、白毛アイルーのクロ。ザレアの口利きでラウト村の農場の管理、酒場にてティアリィのお手伝いを兼任するお手伝いアイルーである。

彼はいつもの農作業の服装を身に纏い、農場の見回りをしていたのだが、急にベルに呼び出されて不思議そうな顔をしている。

「ねえ、クロちゃん。貴方は……ザレアの素顔、見た事、ある?」

ベルの発言に要領を得ないのか、クロは小首を傾げて、頭の上に疑問符を浮かべる。

「ニヤ? ザレアお嬢様ニヤら、いつも素顔じゃニヤいですか」

何を言ってるニヤ? とでも言いたげな表情で返され、ベルは二の句を継げるのを躊躇^{ためら}った。それでも始まって早々に挫^{くじ}ける訳にはいかなかったので、咳払いして真実を述べる。

「ザレアの素顔はあれじゃないのよ? あれは、ヘアイルーフェイク<って言う、防具の一種なのよ」

「そ、そうだったのニヤ!? ザレアお嬢様の隠された真実を目の当たりにしてしまったのニヤ……!!」

「寧ろその発言に驚いてるんだけど」

アイルーには、あれが本物の顔に見えていたのか。いや、単にク

口の知能がそこまで高くないのか。と、失礼な思考が過ぎるベル。
「でさ、アイルーのクロなら、ザレアの〈アイルーフェイク〉をこそと取れるんじゃないかって思ったんだけど……」手を擦りながらベル。

「ニヤ、ボク、メラルーじゃニヤいから、手癖は悪くニヤいですよ？」ポリポリと髭ひげを掻くクロ。

「大丈夫、クロちゃんなら出来るって信じてるわ！」自身満々にベル。

「何を根拠に言ってるニヤ！？ それに、〈アイルー仮面〉の装備を盗むなんて、出来る訳ニヤいニヤっ！！ ボクをアイルー族の面汚しにするつもりニヤッ！！」ぴよんぴよん飛び跳ねて憤怒するクロ。

「じゃあ——マタタビで交渉しましょう」

ベルの提案に、クロは思わず喉仏をコクリ、と動かす。見るからに動揺していた。

「も、物で釣ろうとしてもダメニヤ！」

「成功したらマタタビ五十個でどう？」ニコ、と営業スマイルでベル。

「ニヤん……だと！？ ハアハア……マタタビ……五十個……ですと……！？ ハアハア……」

一撃で陥落してしまうクロ。彼はもう頭の中が桃色の幻想で一杯になっているのだが、それを見つめるフォアンがベルに耳打ちする。
「そんなにマタタビの在庫、有ったか？」

「大丈夫！ ウェズから怪力の種と物々交換で頂くつもりだから♪」ニッコリと微笑むベル。

「抜け目が無いな——」思わず苦笑を浮かべるフォアン。

「マタタビ五十個ハアハア……ハッ！？ ボ、ボクは今、何を考えていたのニヤッ！？」

「マタタビ百個で取引に応じない？」裏に邪惡な色を潜ませた笑みを浮かべるベル。

「ニヤーツ!! 応じずにはいられニヤイツ!!」

瞳がグルグル回り始め、明らかに錯乱した状態で了承するクロ。ベルはニヤリと悪どい笑みを浮かべ、ぐっ、と拳を握り締めている。フォアンは「我、関せず」とでも言いたげにそっぽを向いていた。

作戦その1…問答無用! ザレアの〈アイルーフエイク〉を奪い取れ!

「じゃあ、クロちゃん。向こうで農作業に励んでいるザレアの頭をもぎ取って来て頂戴」

「せめて〈アイルーフエイク〉って言うてくれないか? 果実をもぐみたいに頭をもがれたら恐怖なんだが」咳払いするフォアン。

「解ったのニヤ……ハアハア……何だかボク、とっても悪い事をしてるようニヤ……」フラフラした足取りでクロ。

「マタタビ百二十個」ぼそ、と呟くベル。

「ニヤハーツ!! 行って来るニヤ!!」

狂喜乱舞しながらザレアへと突撃して行くクロ。ザレアは後ろ姿を見せたまま、怪力の種の収穫作業が続けている。彼女の背後へと迫ったクロは飛びつくように〈アイルーフエイク〉へと手を伸ばし――

「――キラリ☆ 秘技・アイルースマッシュ!!」

と、突然叫びながら振り返ったザレアのアッパーを喰らって天高く舞うクロ。十秒近く滞空した後、ぺたり、と敵の只中^{うね}に落下し、動かなくなった。

「にゃふうー……はっ! いつもの癖で、背後の生物を吹き飛ばしちゃったのにゃ!! クロちゃん、ごめんにゃっ!!」

慌ててクロへと駆け寄って抱き起こすザレア。クロは燃え尽きたように真っ白な顔(元々だが)で、カタカタ震える手を伸ばし、虚ろな眼差しでザレアを捉える。

「お……俺の背後に立つニヤ……ですネ、わかりま……ガクリ」意

識を失うクロ。

「クロちゃ——んっ!!」

ザレアの絶叫が朗々と農場に響き渡った。

作戦その1…失敗!

「ニヤルゴ13かッ!! 何あれ!? 背後に立つと自動で吹き飛ばしちゃうの!？」

「恐ろしいスキルだな……これからは俺達も気を付けないとな……」
木陰からザレアとクロの様子を覗^{うかが}っていた二人は、ガタガタ震えながら惨憺^{さんたん}たる結果に恐怖していた。

「むう〜! 中々手強いじゃない、ザレア! でも、何としてでも化けの皮を剥いでみせるわよ!!」

「寧ろ猫の皮だな」

「そんなツツコミはいいから! ……さて、次の作戦は——」

作戦その2…美味しくて食べ難い物を食べさせたら、外さずには
いられない!

「ザレア、これ、あたしの奢^{おご}り!」

農作業を終え、農場から酒場へと戻ってきた三人（クロは心労が祟^{たた}って小屋で休憩中）。ベルは早速次なる作戦を実行に移すため、ティアリイに頼んで、東方から伝わってきたとされる“ラーメン”なる食べ物^ををザレアにご馳走した。

「にゃわーっ! ベルさんの奢りなんて、明日は爆弾かにゃ!？」
「色々ツツコミ所満載だけど敢えて聞かせて。天候が爆弾じゃないわよね!？」

ベルのツツコミなど意にも介さず、ザレアは井一杯に盛られたホカホカの麺を見て、〈アイルーフェイク〉の目許を輝かせている。
「それじゃ、いっただっきにゃーす!!」

来る！　と二人の視線を一挙に受ける少女は、するりとどこからともなく一本のストローを取り出した。そしてそれを使って――麺を一本一本吸い上げ始めた！

「ぢゅるっ、ぢゅるぢゅるぢゅうううう！！　にゃーっ、美味しいのにゃーっ！　ぢゅぢゅぢゅぢゅうううううううう！！」

酒場は、ザレアが奏でる、麺をストローで吸い上げる酷い音によって蹂躪じゅうりんされた。

あまりの音声に、ティアリイのいつもの営業スマイルはどこか曇っているし、相席していたコニカは表情を真っ白にして動きが硬直している。フォアンは何と無く予想できていたのか、うんうんと納得したように頷き、ベルはあまりの音声に顔を顰しかめていた。

「……ザ、ザレア……？」

「ぢゅぢゅー、ぢゅっ、ぢゅぢゅっ！！　にゃ？　どうしたのにゃ？　ベルさん」ストローを置いて顔を上げるザレア。

「ラーメンはね、その……ストローで吸い上げるものじゃないのよ……？」酷く疲れた表情でベル。

「！！　そ、そうだったのかにゃ……驚愕の真実を、オイラは知ってしまったのにゃ……！」若干震えているザレア。

「その反応にこっちが驚愕だわ！！」頓狂とんきやうな声を張り上げるベル。

「じゃあ、どうやって食べるのにゃ？」キョトン、と小首を傾げるザレア。

「……えっとね、こう……箸はしって言う木の棒で掴んで、ずるずるーっ、と啜すすって食べると、とっても美味しいのよ」実践しながら教えるベル。

「にやるほど！　じゃあ試してみるにゃ！」

ザレアが箸を掴み、麺を摘む。その行為に、今度こそへアイルーフェイクを脱ぐシーンを連想するベル。食べ難い……いや、へアイルーフェイクを付けたまま食べられる筈が無い！　ならばもう外すしか――

ザレアが麺を摘んだ箸をへアイルーフェイクの口許あてへ宛がうと、

「ずるずるーっ」と麺が〈アイルーフエイク〉の口許に吸収されていった。

「にゃにゃっ！ 本当だにゃっ！ とっても美味しいのにゃ！」

感激したのか、再び麺を掴み上げ、〈アイルーフエイク〉の口許から啜り上げていくザレア。

その光景を見ていたベルの顔は死んでいた。フォアンに、「戻ってこーい、ベルー」と声を掛けられてやっと復帰する。

「ふあい！？ どどどどうなってんの！？ 〈アイルーフエイク〉って被り物だよね！？ 穴なんて空いてないよね！？」がたーっ、と椅子を蹴倒してベル。

「にゃにゃっ！ 被り物にゃんて酷い事、言わにゃいで欲しいにゃ！ これはオイラの顔なのにゃ！」ぷんぷんと腕を振り回すザレア。
「くう……作戦、失敗だわ……！！」小声で負け戦の宣言をするベル。

作戦その2…失敗！

夕暮れに沈んだラウト村。今日ものんびりとした時間が過ぎ去り、明日の準備を始めるために、空は静かに暮れていく。遠くの人々に掛かる日輪が、柔らかな橙色の陽光をラウト村に射込んでいる。

ザレアに農場の見回りを頼んだ後、ベルはフォアンと恐らく最後となる筈の作戦会議を開いていた。

「フォアン……あたしは今日、禁じ手を使おうと思うの……」深刻そうな表情でベル。

「……ベル。俺は——止めないぜ。俺はベルを信じる」ベルと同じ表情でフォアン。

黄昏に満ちた酒場の中で、ベルは氷樹リングのジュースを呷り、
——告げる。

「寝込みを襲撃するわ……！」

「つまり、——夜這い、だな？」ふ、と澄まし顔でフォアン。

「違うわよ!! 寝てる間にへアイルーフエイクを外すだけよ!
! 何を盛大に間違えてんのあんた!? 態わざとよね!?」テーブル
を盛大に叩いてベル。

「生きて、帰ってこいよ……?」苦しげな表情で視線を逸らすフオ
アン。

「そんな死地に向かわせるような台詞、吐かないでくれる!? 死
亡フラグじゃないそれ!?」

ぎゃーぎゃー喚きながらも、世界は眠りの刻限へと迫りつつある。
その禁忌、暴くべからず……後編へ続く。

0301. その禁忌、暴くべからず〈前編〉（後書き）

狩猟が無い？ いつもの事です^-^
後編をお楽しみに♪

0302. その禁忌、暴くべからず〈後編〉

作戦その3…寝込みを襲撃すればきつと大丈夫！

草木も眠る丑三つ時。外灯など無いラウト村は、完全な闇に呑み込まれている。周囲にはモンスターの息遣いが聞こえてきそうな深い森が大口を開けて佇み、^{たたず}淡い月光が青白く世界を染めている。

ラウト村の専属獵人^{ハンター}の住まいは連結された小屋。ベルの小屋は四つある内の左から二番目。ベルの部屋の右にはザレア、左にはフォアンが寝泊りしている。四つ目の部屋は普段は使われておらず、専^{もっぱら}ら客室として用いられている。

ベルは月光に淡く照らされた戸外^{こがい}にこっそりと出て来て、隣室であるザレアの部屋への侵入を試みていた。

小屋の扉には施錠する装置が無い。まるで危機意識の無い部屋に、当初ベルは面食らったが、それだけここが平和なのだと自分に言い聞かせる事で、何とか納得している。

……今回の作戦では、そのお陰で易々と侵入を可としているため、ベルとしても強くは言えないのだが……

音を立てないようにこっそりとザレアの部屋の扉に手を掛け――「待て」――口から心臓が飛び出しそうになった。

肩に手を置かれた事で悲鳴が湧きだした瞬間、その口を覆われ、悲鳴は口腔^{くわうくう}で弾けただけで済んだ。突如として発生した人の存在に驚きを隠せないベルだったが、相手の雰囲気を感じ取った瞬間、いつもの彼だと思い出す。

口唇を塞いでいる手を叩いて「大丈夫」と親指を立てると、背後に立つ人物――フォアンは頷いて応じた。彼の存在を確認すると、ベルは音声を絞って小声を発する。

「何よ、結局あんたも来るならそう言えば……」

「ベル。お前は今、致命的な失敗を犯したぞ」

月光の淡い光を浴びたフォアンは、恐怖心を煽るような色彩を帯びている。応じる彼も小声だったが、空気に浸透するようにベルの心臓を鷲掴みにする。

「……どういう事？」怪訝けげんそうに返すベル。

「ザレアの部屋に入りたいのなら、罨ひそを解除する必要があるんだ」
「……罨？」

ベルが眉根を顰ひそめて尋ねると、フォアンはザレアの部屋の扉を指差し、服のポケットから小さな鋏ハサミを取り出す。それを扉の隙間に宛あてがい、下から上へとゆっくり動かし……やがてある部分で鋏を動かす。ちきん、と鋏が何かを切る音と共に、かちっ、と何かが作動するような音が聞こえた。……が、それ以上何が起こるでも無く、静かなものだ。

「……今、何したの？」ボソボソとフォアンに耳打ちするベル。

「扉を不用意に開けたら、小タル爆弾が爆発する絡繰からくりが施されてるんだ。恐らく、来客が来た時に一発で目が覚めるように、な」

その来客が夜中であっても、ザレアほどの野生児ならば、小タル爆弾の爆発音だけで容易に覚醒するだろう。決して空き巣に入られると思っっている訳ではなく、単に来訪者を快く迎え入れるための装置とは言え、侮れない。

「……てか、あんたよく知ってるわね……」

感心半分呆れ半分の表情で嘆息するベル。フォアンはゆっくりと扉を開けながら「昼間に訪ねた事があったからな。経験済みだ」と苦笑を滲ませる。

ザレアの部屋の中は深、と静まり返り、薄闇に覆われている。外界の闇に目が馴れていたためだろう、可視光の無い世界でも、割と視野が利く。そもそも、ベルの部屋もフォアンの部屋も同じ造りなのだから、すぐにザレアが眠る寝台ベッドを見つける事が出来る。

寝台を覗くと、へアイルーフエイクを被ったまま布団を被る娘がいた。

「……思うんだけど、寝る時もへアイルーフエイクを被ってたら、

寝苦しくないのかしら？」

「それは今更だろ？ 多分、馴れなんじゃないか？」

就寝時もザレアが「へアイルーフエイク」を手放さない事は周知だったが、止むを得ない。引っぱがすなら今が最大の好機。

ベルは小さく唾を嚥下し、喉がゴクリ、と蠕動する。今からやろうとしている事は、フォアンの言うとおり禁忌に等しいものがある。仲間の秘密を暴こうと言うのだから、今後、ザレアがラウト村を去ってもおかしくない。そんな危険を背負ってまでする事では、決して無い。

——けれど、一度芽生えた好奇心の火を消す事は至難の業だ、とベルは開き直る。

「……もう、後戻りは出来ないぞ……？」

隣に立つフォアンの声が、いつに無く険しい。彼とて、自分と同様に好奇心の燦りは抑えられない筈だ。けれども——仲間が直隠しにしている事柄を暴くのには抵抗を禁じ得ないのだろう。常に仲間を案じる彼らしい諫言だったが——もう、ここまで足を踏み入れたのだ。ベルも、後には引けなかった。

「ごめん、ザレア……拝顔奉るわよっ！」

迷いを吹っ切り、へアイルーフエイクに手を掛け、一気に引っこ抜く！

すぽーんっ、とへアイルーフエイクがすっぽ抜け、ザレアの顔が露出する。薄闇に沈みながらも、脳天に点った火花がその表情を克明に映し出す。

全体が茶色い。小麦色とかではなく、樹木の色だ。それを鉄の輪で留められ、円柱状に形が整っている。頭には一本の髪の毛——ではなく、導火線が延び、先端には薄闇に光を落とす光源——小さな火花が散っている。

……その事実気づくまで幾許の時間が掛かったか。ベルとフォアンはザレアの素顔を見たまま暫し硬直していた。

「……フォアン」ベルが攣りそうになる舌を何とか動かす。

「……何だ」応じるフォアンもどこか舌足らずに言を返す。

「これ、って……」

——爆弾、よね？

そう、ベルは続けようと思ったのだが、次の瞬間、ラウト村に轟音が響き渡った。ラウト村を囲う森林が驚きで目を覚ましたかのように、随所で小鳥が飛び立ち、草食竜が喚声^{おのの}を上げて走り出し、肉食竜も慄^{おの}いて走り逃げて行く。

ザレアの部屋を中心に迸^{ほとばし}った閃光の濁流は、一瞬だけ夜陰を切り裂き、白昼の明るさを得て、次の瞬間には再び夜更けの空を取り戻す。

夜の闇が再び戻ってきたザレアの部屋に、灯りが点る。小タル爆弾型の蠟燭^{ろうそく}に火を点して立っているのは、ザレアだった。

「にやつふつふつ……オイラの“ニャン法・変わり爆弾の術”に引っかけたのは誰かにゃ!？」

自信満々に告げるザレアの前には、目を焼かれて「目があー、目がああー」と蹢躅^{よつめ}くベルとフォアンの姿が映り込んだ。

「にゃにやつ!？」二人とも、大丈夫かにゃつ!？“爆造のロージヨ”に依頼した閃光爆弾にゃから、痛くは無いと思うのにゃけど……っ」

この期に及んでベルとフォアンの心配をするザレア。そんな彼女の心遣いに、ベルの心は折れた。

彼女には……敵わない……

作戦その3…失敗!

「——にゃ? オイラの素顔?」

ザレアの部屋にて、ベルが半ベソを掻きながら今までの経緯を暴露すると、彼女は「にゃから」と、どこか不満そうに腕を振り回す。

「オイラの素顔は、いつも晒してるじゃにやいかっ！　これにや！
この顔にゃ！！」

「……うん、判ったよ。あたし、これ以上は手を出さないよ……」
これ以上、作戦を敢行したら、本当に命が幾つ有っても足りない
気がしてきたのだ。

好奇心は確かに満たされないが、命有つての物種。それに、やっ
ぱり仲間が秘匿しておきたい秘密を、無理矢理暴こうと言う行為自
体が間違っているのだ。

そう自分を納得させると、ベルはザレアに就寝の挨拶を告げ、自
室に戻って寝直す事にした。

翌日。酒場に集まったラウト村専属の獵人三人は、本日の仕事に
就いての話し合いをしていた。

「あ、ザレアさん。新しい顔、ここに置いておきますね♪」

酒場の奥から現れたのはティアリィ。彼女が胸に抱えている物は、
いつもザレアの頭を覆っているへアイルーフエイクだ。それをカ
ウンターの上に置き、ニコニコといつもの営業スマイルでこちらを
見つめている。

それを見たベルは開いた口が塞がらない。フォアンは「新しい顔
って、ティアリィさんが作ってたんだな」と納得したように頷いた。
「ありがとにゃーっ！」ザレアは嬉々とした動きで手を振っている。
「ちよちよちよ！？」何、自然に新しい顔とか貰っちゃってるのザ
レア！？　愛と勇気が友達のアンパンじゃないのよ！？　やっぱり
素顔を見せなさいッ！！」憤然と立ち上がり、ザレアと取っ組み合
うベル。

「なっ、何するにゃっ！　オイラの素顔はこれにゃっ、あれも新し
い素顔なのにゃっ！」

ドツタンバツタンと酒場で暴れ回る二人に、ティアリィは「あら
あら、困った人達ですねえ」と微笑を浮かべて傍観を決め込んで
いる。

「……絶対に狙ってたな、ティアリィ」微笑を滲ませるフォアン。
「——あっ、あんな所に対巨龍爆弾Gがっ！」

ベルが適当な事を言っ指差すと、ザレアのへアイルーフェイク
✓が即座に振り向き、「どこにやつ、どこにいるのにゃーっ!!」
と喚き始める。

「でええりゃーっ!!」

“敵将、討ち取ったりーっ!”とでも言いたげにザレアのへアイル
ーフェイク✓を引っぺがすベル。今度こそそこには紛う事無き少女
の顔が——

「なあんだ、ザレアの顔って意外と——」

「……………みいたあにゃあ……………」

刹那、ラウト村の酒場にて悲鳴が上がった。

想像を絶する断末魔の連続した絶叫に、村長宅で書類を漁ってい
たコニカは「怖いですーっ!!」と縮み上がって布団の中に引きこ
もり、武具屋のガーネハルトは「ああんっ、誰かあんっ!」と筋肉
の塊を振らせて悶絶したとか何とか。

その日の午後。

ラウト村に行商人のウエズが到着した。彼は何とかガーネハルト
に見つからないように隠密スキルを発動させつつ、酒場へと辿り着
き、いつもどおりの気軽さで戸を開け放った。

「ちわーっ、行商人のウエズっすー。……って、どうしたんだ、皆
?」

中には不思議な情景が広がっていた。ザレアを中心に皆が土下座
している姿だった。いつもは傍観を決め込んでいるティアリィです
ら土下座している姿を見て、ただ事ではないと察するウエズ。

ベルは顔も上げずに、「何でも……無い……わ……」と体を震わ
せながら言を返す。

「いやいや、どう見ても何でも無くは無いだろ。ザレアがどうしたんだよ？」

「ウエズ……“様”が……抜けてる……ぞ……」同様に顔も上げずにフォアンが呟く。

「様？ 誰にさ？」要領を得ないウエズ。「あ、もしかしてザレアって偉い人の娘さんだったとか？」

「「……………」」

返ってきたのは沈黙。ウエズは三人の様子を見て、徐々に顔が青褪めていく。

「え、ちょ……マジで？ あれ、僕、何か失礼な事したかな……」

「違うにゃよ♪ オイラ、全然偉くないにゃ♪ ただ皆、オイラの顔を剥ごうとしたから、ちょっぴり怒っただけなのにゃ♪」

「アイルーフェイク」越しでは判り難いが、声質から笑っているのだと判るザレア。

「顔を剥ぐ！？ おいおいベル、お前、何言う恐ろしい事するんだよ……幼馴染の僕でも流石さすがに引くぞ……」

人間の所業とは思えない、と言った風に別の意味で顔を青褪めるウエズ。そんなウエズに、ベルは一言も返さずに沈黙を守っている。「……えっと、ザレア。どんな怒り方したら、皆こんな風になるんだ？」

若干、恐怖が足許に迫りつつあるウエズ。ベルがここまで小さく見えるなんて、いつ振りだろうか。明らかに常軌を逸した何かに接触した後のベルである。

ザレアはキョトンとしたように顎に人差し指を添えると、「うにゃくん？」と要領を得てないように、「オイラ、ちょっぴり怒っただけにゃよ？ 皆さん、優しい人ばかりだからにゃ！ ちゃんとオイラの言う事を聞いてくれただけにゃ♪」

「にゃ？」と、皆に視線を向けるザレアに、「仰る通りですザレア様ッ」と三人の唱和が続いた。

「……物凄く怖いんだけど！？」ベルに怒られる時の数倍の恐怖が

あるんだけど!? 皆、早く元に戻ってくれエエエツツ!!」

ウエズの喚声が響き渡り、再びコニカは村長宅で「い、一体何が起こってるんですかぁっ!?」と泣き笑いの表情で布団に潜り込むのだった。

この後、数日の間、ザレアの天下が続いたそうなの。

EX3 【ザレアのヘアイルーフエイク】が脱げる物語——【完】

0302. その禁忌、暴くべからず〈後編〉（後書き）

やっぱり謎は謎のままと言う事で一つW

次回（現段階で最後）のリクエストは、【リボンとワイゼン翁】の物語になります♪

それでは次話をお楽しみに♪

※ちよっぴり更新が途絶するかもです。

0401. 悪夢の後に（前書き）

長らくお待たせ致しました、リクエスト第4弾、【リボンとワイゼン】の物語をここにお送り致します。

それでは本編をどうぞ♪

0401. 悪夢の後に

狩猟。それは獵人^{ハンター}とモンスターの互いの存命を賭したサヴァイヴァル。喰うか喰われるか、――狩るか狩られるかの、二極化した世界である。故にこそ、死の影が常に隣にあり続け、その妖しい光に魅入られた者から命の灯火を掻き消されていく。

人間にとって過酷な環境である砂漠。陽が落ちても尚、降り注ぐ月の淡い光が煌々と照らし出す、視界に広がる渺茫^{びようぼう}たる砂地。そこで今、一つの狩猟が終わりを迎えようとしていた。

人間ほどの大きさは有ろうかと言う二本の角を額から突き出した、二本足で聳^{そび}え立つ巨像。堅牢なる黄土色の甲殻は、月光を受けて鈍い輝きを放っているように映る。飛竜種である事を示す二対の翼は、砂に塗^{まみ}れていても尚、その鋼のような筋肉が視認できる。人間の五倍以上の体長に加え、獐^{どう}猛^{もう}そうな雰囲気^きに、誰もが恐怖に息を呑むモンスター――“砂漠の暴君”とも言われる、“角竜”ディアブロス。

彼は、鋭く逞^{たくま}しい二本の角の一本の先に付いた肉塊を、自然が作り上げた土壁に叩きつけ、その深い色合いの瞳に勝者の余裕を浮かべる。

「……あ、……………ああ……ッ!!」

角の先に付着した肉塊――まだ息のある獵人が角で刺し抜かれた状態を見て、一人の少女が言葉にならない嗚咽^{おえつ}を上げる。彼女が先刻まで全力で振るっていたハンマーは地に落ちている。そして、先刻までハンマーを握り締めていた両腕には、深々と刻まれた裂傷^{こんこん}。滾々と溢れ出る流血は、直に致死量へと至るだろう。それでも尚、少女は動けずにいた。

鮮烈に網膜に焼きつけられる映像。仲間が――先刻まで共に戦っていた同胞が、どう足掻いても生きて帰れない現状に置かれ、少女は狂^{イカ}れる寸前だった。視認した映像が、脳内で上手く再生されない。

——現実を許容できない。

ディアブ羅斯は角の先に付いている肉塊を見て「ゴアア、グアア」と唸りながら、その生死を見極めるでもなく、既に己が勝利は確実と言わんばかりに、弱者に対する目で肉塊を見つめている。

肉塊はまだ意識があるのか、喀血かっけつしながらも虚ろな瞳で何かを探している。シヨック死してもおかしくない致命傷を負いながらも、少年はまだ死ねずにいた。煉獄よりも苦しい生き地獄の中、少年は掠かすれた声で言葉を紡ぐ。

「……………逃げ……………ろ……………ごぼッ。……………オレに……………構う……………な……………ッ」

それは、少女に向けて放たれた命令だった。間もなく消え去る命の灯火を更に激しく燃え上がらせ、懸命に少女へ伝える最後の言葉だが、少女にはそれが出来ない。唯一の仲間である彼を置いて逃げる事など、出来る訳が無い。——併しかし、少女には彼を助ける術など無かった。己が扱う武器は、両腕に走る裂傷が使用を阻害する。

少年と二人で戦っていた時には希釈きしゃくされていたモンスターに対しての恐怖心が、彼の致命的な状態を目視した瞬間、発露した。二人で何とか狩猟できるかも知れなかったモンスターを、これから一人で相手にするなど、少女の精神状態で叶う道理が無い。

弱者は強者に屠ほふられる……それが自然の摂理であり、獵人はその摂理を覆して強者を相手にする屈強な戦士だ。それが出来ぬ今、少女は眼前に佇む生態系の頂点に座す怪物に喰われる瞬間を待つだけの“餌”としてしか機能しない。

「……………に、げろォ……………ッ!!」

自己の生命など無視して、断末魔の声を張り上げる少年。その灯火が消え去る瞬間まで、少女の身を案じている。瞳から流れ落ちる雫は、頬を濡らし、赤く汚れた角の上へと落ちていく。

それが聞こえても、少女には動く事が出来なかった。見捨てて逃げるなんて出来ない。今まで一緒に狩猟して来た仲間、一番信頼を置いていた同胞、互いに高め合った同志——そんな相手を捨て置く

など、出来る訳が無かった。

少女の瞳には絶望の色が濃く浮かび上がり、落涙する激情の雫も尽きない。このまま彼が死に逝く様を見届けたい訳ではない。どう足掻いても助かる筈の無い彼を、己が手で救い上げたい——彼女の望みは、それだけだった。

——不意に、ディアブロスが角を大きく振り上げ、進路を変えて走り出した。突進——向かう先には、この狩場を包むように聳え上がる自然が形成した土壁。そこへ向かって直走る^{ひたはし}ディアブロス。角の先には——虫の息の少年。

——やめて。

少女の脳髓に反響する絶叫は、喉から出る事は無かった。代わりに喉から走り出たのは、言葉にならない喚声——

ずんっ、と大地が鳴動すると同時に、ディアブロスの角の先で串刺しにされていた少年が——

「————ッッいやああああああああ——————
——ッッッッ!!」

意識が覚醒すると同時に、少女は布団を跳ね上げて自分の体を抱き締めた。徐々に意識が内から外へと向かうと共に、ここが砂漠ではない事、——悪夢の中ではない事を理解していく。

寝台^{ベッド}に寝かされていた自分の周囲には、無数のメイドの姿。彼女達は皆、一様に心配そうに自分を見つめている。

「大丈夫かしら?」「気分は悪くないかしら?」「お水をお持ち致しましょうか?」「酷く^{うな}魘^{うな}されましたわよ?」「安心して、ここは安全な場所ですわ」「私達が付いていますわよ!」「今、ご主人様をお呼び致しますわ」「寝間着を替えられた方がいいですわね」同時に発声するため、誰が何と言っているのか理解が追いつく前

に、メイドの数人が部屋から出て行く。彼女達の優しく柔らかな笑顔を見て、やっと思考が現実^{じじつ}に追いついた。

「そうだ……私……助けられたんだ……」

ここは死後の世界ではないと、感覚で理解する。全身を覆う気怠さと鈍痛、そして無数に浮かぶ汗の粒が、少女に現実を認識させる。悪夢の世界から解放された事に虚脱感を覚え、少女の目許に感情の雫が浮かび上がる。

「……ふむ。心に深い傷を負ったようじゃのう」

部屋中に反響していたメイド達の囁^{ささや}きが止み、暖^ぬれた男声^{おとここゑ}が少女の耳^{みみ}を打った。未だ鳴り止まぬ鼓動を抑えるように胸に手を添えたまま、少女は顔を上げる。部屋の戸口からメイドに傳^かれて入ってきたのは、長い白髪を有した老爺。白い口髭が胸元まで伸びている事からも歳は相当の筈^{はず}だろうに、何故か歳を感じさせない生気を感^{かん}じさせる男。

老爺は少女の元まで歩み寄ると、その顔を眇^{すく}めた瞳に収める。少女は未だに悪夢を引き摺っているのか、恐怖に彩られた表情を浮かべている。その額を人差し指で突き、老爺は優しい表情で口を開いた。

「今は何も考えずに休むと良い。身の回りの世話はメイド達に任せてのう」

それだけ告げると背を向け、老爺は部屋を立ち去ろうとする。少女は呆氣に取られた顔で老爺を見つめていたが、彼が戸口を潜ったその時、閃いたように舌を動かした。

「――レットはッ、」大声を張り上げて、そのまま硬直する少女。どう告げたらいいか判らず、舌が麻痺したように動きを止める。その間、老爺は黙って戸口に立ち続ける。「……その、私と一緒にいた、獵人は……」何とか言葉になったそれは、少女の最後の希望を託されていた。

老爺は黙して戸口に立ち続けている。振り返り、――厳しい表情になっている事に気づいた少女は、その時既に、最悪の返答を予期

していた。

「――助かったのは、又シだけじゃ」

簡潔に、老爺は言い放つ。そしてそれが全てだった。

少女は耐え難い現実を突きつけられ、思考が停止した。やがて回転を始める思考は、一切の言葉を作り出せず、意味も無く空回りを始める。

そこで少女は心の淵に芽生えた激情に耐え切れず、意識を失う。

その時に見た悪夢は、妙に空虚なものだった……………

少女が悪夢に魘される日々は続いた。幾日も双角の暴君に追われ続ける夢を見続け、眠る事自体に恐怖を覚える程に、少女は憔悴^{しょうすい}していく。何度も蘇る地獄。幾度と無く彼が死ぬ瞬間が繰り返される悪夢。少女の精神は磨耗し、感情が外に出なくなりつつあった。

そんな或る日の事だった。いつも身の回りの世話をしていたメイドの姿が無く、珍しく少女は一人ではんやりと窓の外の景色を眺めていた。美しい街並みが広がる景色。悪意に満ちた凶夢とは掛け離れた平穏な世界。それをぼんやり見つめていると、どっちが現実なのかよく解らなくなりつつあった。

本当は、あの時に既に自分は死んでいたのではないか。老爺に助けられず、ディアブロスに食い殺され……今、少女の肉体は死後の世界にあり、現実と言う名の夢を見ているに過ぎないのではないか……そんな気がするのだ。

かちや……、と扉が開く音が聞こえ、少女は虚ろな動きで戸口に視線を向ける。いつも叩扉^{ノック}してから入ってくるメイド。今日は珍しく叩扉を忘れたのだろうか、と思って視線を注ぐと、そこには自分と同年代――十代半ばと思しき少年と少女の姿があった。

少年は黒髪をリーゼント――“ゲリョスソウル”と言う髪型に固めた、顔中傷だらけの、取っつき難そうな雰囲気纏っている。執事服を身に纏い、両手をズボンのポケットに突っ込んだまま、こちらを見つめている。尤^{もつと}も、彼の瞳は“見つめる”ではなく“睨みつ

ける”の方が正しそうだが。

少女は緑髪を短く切り揃えた、欣々ニコニコと終始笑みを浮かべている、見るからに愉しそうな雰囲気纏っている。メイド服を身に纏っている事から、あの無数にいるメイドの一人だと思ふのだが、メイド達が十代後半に見えるのに対し、眼前の少女は十代半ばに見えるためか、彼女には初めて逢ったと感じた。

メイド服の少女はトテトテと覚束無い足取りで、寝台に座り込んだ少女へと歩み寄って来る。執事服の少年はブスツと面白くなさそうな表情のまま、蟹股で乱暴な足捌きでこちらへやって来る。

「こんにちはっ！」

ぴよこんっ、とメイド服の少女は飛び跳ねながら挨拶アイサツを発する。快活な表情と共に放たれた明朗な声に、獵人の少女は即座に言葉を返す事が出来ず、呆氣に取られた顔でメイド服の少女を見つめる。

「オンドリヤ、挨拶も出来んのかア？ 最近の獵人は礼儀も知らんようじゃのう」

ドスの聞いた声を発したのは、執事服の少年。忌々しように獵人の少女を睨み据える姿からは、悪意以外の何も感じられなかった。獵人の少女は感情の起伏が無いまま、執事服の少年を見据える。

それからメイド服の少女へ視線を転じ、小さな声で、「……こんにちは」と挨拶を返す。

「お姉さんはねっ、ロザって言うのっ！ 宜しくねっ♪」

手を伸ばして握手を求めるメイド服の少女——ロザに、獵人の少女は再び呆氣に取られるも、今度は執事服の少年が小言を言う前に「……私はリボン。宜しく」手を差し出し、ロザと握手を交わす。「ワシはギースじゃ。……ふん、獵人とか言うけえ、どんな奴かと思っちょれば……ワシらと変わらんのじゃけえのう」

執事服の少年——ギースはそう吐き捨てると、獵人の少女——リボンを横目で見やる。瞳に映った少女は、悄然しやうぜんとした面持ちで目許に涙を蓄えていた。

「……………っ、そうだよ、あんた達と何も変わらない……………ッ、もう

私は……、獵人じゃ、ない……ッ」

堪えきれずに溢れ出る激情に、リボンは嗚咽を殺すように胸を押さえた。ギースは慌てたように「な、泣く事は無いじゃろ!？」と狼狽^{アタフタ}し始め、ロザは「もうっ、ギース君は意地悪なんだからっ!」と眉根を寄せた顔で彼を非難する。

「安心してっ、リボンちゃん! ギース君はああ見えても、酷い事も言うけど、悪い子じゃないのっ。きつと、リボンちゃんの事を元氣付けようと思って空回りしちゃってるだけだから♪」

「ロ、ロザ姐っ! そんな事は言わんでいいんじゃない!」

ロザが「よしよしっ」とリボンの頭を撫で、ギースは背を向けて黙り込む……リボンが泣き止むまで、それは続いた。

やがて激情が納まり、リボンはどこか恥ずかしそうに二人を見つめる。

ロザとギース。年齢が近いからか、メイド達に比べると、彼らと一緒にいるとどこか安心できた。ロザは終始にこやかにリボンに話しかけてくるが、ギースは黙り込んで勃然^{ぼつぜん}としたまま。それでも立ち去る事はせず、暇そうにしている。

「リボンちゃんを助けたお爺さんってね、ワイゼン翁、って人なんだよーっ」

ロザが嬉々として告げた内容に、リボンは思わず瞠目する。その名は獵人の世界では有名な部類に入る。【獵賢】の渾名^{ふたつな}で知られる、ギルドに狩獵の腕を認められた実力者——ワイゼン。“黒子を纏いし龍弓使い”と言えはそれだけで通じる程に、獵人の世界では名が通っている老練な獵人だ。

獵人の端くれでも解る著名人に、リボンは驚きのあまり言葉を失ってしまう。

「おやっさんはもう歳じゃのに、ワシらのために今も獵人として路銀を稼いでくれちよる。獵人としては勿論じゃが、ワシもおやっさんみたいなでっかい人間になりたいんじゃない」

リボンの反応に気を良くしたのか、突然嬉しげに語り始めるギー

ス。その瞳には喜色が満ち、彼が心底からワイゼンを慕っている事が窺い知れた。

「ギースも……獵人、なの……？」

ポツリと漏れた言葉に逸早く反応したのはロザの方だった。

「うん、ギース君もそうだけど、実はお姉さんもなんだよ♪ このメイドさん達はみーんな、獵人としての実力も兼ね備えた凄い人ばかりなんだよ♪」

「メイドも、皆っ!？」

思わず大声を張り上げて驚愕するリボン。立ち居振る舞いでは解らなかっただけに、驚きは大きかった。口をポカンと開けて、呆然としてしまいうリボン。

「獵人業は副業みたいなもんじゃがのう。おやっさんを守るために、狩場に繰り出す時もあるけえ、自然と獵人としての知識も必要になってくるじゃきん」

獵人が副業。この時世、脚光を浴びたい、名を売りたい、富を築きたいなど、多くの欲を懐^{いだ}いて獵人になる者は後を絶たない。皆が皆、獵人として食って行ける訳ではなく、多くが致命的な失敗を犯して怪我を負うなり命を落とすなりして一戦を退かざるを得ないと言うのに、それを副業にする者など、そう多くはいないだろう。

獵人は狩獵が成功した時の報酬が、言ってしまうえば美味しい事が多い。流石に簡単な依頼……特産品の採取や小型モンスターの間引きなら報酬は少ないが、獵人として脚光を浴び易い巨大モンスターの狩獵になると報酬はでかい。それだけで何ヶ月も生活できる程に、だ。だからこそ獵人を志願する者は後を絶たない。

その報酬を無視してでも、ワイゼンに仕えるメイドと執事。その絆に、リボンは何故か、自分にも通じる物があると感じてしまった。「……ねえ、ロザ」だからだろう、不意にその思考が脳裏を過ぎり、そのまま言葉として喉を通過した。「――私、ワイゼン翁に弟子入りしたい」

0401. 悪夢の後に（後書き）

今回は割かしシリアスチックな物語になる．．．予定です。

と言うか、リボンとワイゼンだけの話じゃないのかよ！ とツツコミが入れられたらぐうの音も出ません。

これが P の げんかいだっ！

それでは次話をお楽しみに♪

0402. 弟子入り（前書き）

シリアス展開と言うか、淡々とした文章が続きます。

コメディ成分はとっても少なめですw

それでは本編をどうぞ♪

0402. 弟子入り

「――ほう。ワシに弟子入りしたい、とな？」

場所は屋敷の書斎。両側を聳^{そび}える書棚に挟まれ、奥の椅子に腰掛けた老爺がこちらを見つめて指を組んでいる姿が見える。

入口側に立つ、シャツにパンツ姿の少女はリボン。両隣にはメイド服の少女ロザと、執事服の少年ギースが立っている。

「――はい」真剣な表情で頷くリボン。

白髪の老爺――ワイゼンは品定めするようにリボンを見据える。緩やかに、まるで時が止まってしまったのでは、と思える程に音の無い時間が流れる。

「……理由を聞かせて貰おうかの。何故、ワシに弟子入りしたいのか」

嘆息と共に背凭^{せもた}れに深く凭れかかるワイゼン。組んだ指を腹の上に載せ、どこか見下ろすような姿勢でリボンを捉える。

高圧的な視線を受けても、リボンの意志は折れなかった。一つ頷き、リボンは口を開く。

「ワイゼン様が高名な獵人^{ハンター}だって、皆から聞いて知ってる。私は、仲間を守る獵人に……モンスターから仲間を守る位に強い獵人になりたい。ワイゼン様に師事すれば、そんな獵人になれると思っ
て……」

曇りの無い瞳で、リボンは自分の意志を告げる。迷いは無い。彼ほどの実力者ならば、仲間を蔑^{ないがし}ろになどしない……特に銃士^{ガンナー}である彼ならば、仲間を援護する技術にも長けているだろう。故にこそ、彼に師事すればと言う意志が湧くのだ。

リボンの澄み切った発言を前にしても、ワイゼンの曇った表情は晴れない。寧ろ、更に苦味を増したようにすら思える。再び嘆息を漏らし、ワイゼンは瞑目^{めいもく}する。

「……ヌシは、モンスターの手により、眼前で仲間を殺された」

ピクリ、とリボンの体が震える。思い出したくも無い現実を想起させられ、激情の渦が心中から溢れ出しそうになる。

リボンの胸中を知らない訳は無いだろうに、ワイゼンは^{まぶた}瞼を上げると深刻な表情で彼女を見据え、更に過酷な言を紡ぐ。

「ヌシがその時、怪我を負った事、忘れた訳ではなからう？　ヌシが目覚める前に医者と言ったが、ヌシも気づいておる筈じゃ。――ヌシはもう、ハンマーは握れんよ」

リボンの体が再び震え、その瞳に陰が差す。

……気づいていない訳が無かった。リボンは^{ベッド}寝台に寝かされていたこの数日間、何もしなかった訳ではない。包帯が巻かれた両腕を動かそうとして、鋭い痛みが走った事。食事を摂る時に、両手を動かす事に難儀した事。日常生活に於いてすら不便さを感じるこの両腕で、モンスター相手にハンマーを振るう事など、最早叶わぬ事を、リボンは理解していた。

「――でも、」リボンは湿っぽい感情が出ないように心を抑制し、抑揚無く声を吐き出す。「ハンマーは握れなくても、ボウガンなら、扱える筈」

リボンの苦しい^{ばくろん}駁論に、ワイゼンは思わず^{じつもく}瞠目する。

ハンマーは両腕の筋肉を限界まで酷使する武器。けれどもボウガンなら、ボウガンを構える時の重量と、弾を撃つ時の反動にさえ耐えられれば、運用は可能な筈。

併^{しか}も、師事する相手は銃士で名を上げた【**獵賢**】――ワイゼン翁。彼ほどの名銃士にはなれなくとも、獵人として復歸する位なら不可能ではないだろう。

「……呆れた奴じゃのう」重たい嘆息を落とすワイゼン。「獵人として貰かずとも、ヌシには他に幾らでも生き方があるじゃろうに」
「――私は一度死んだ身です」決然とした表情で、リボンはワイゼンを見据える。「ワイゼン様に救われなければ、この身は朽ちてた。……だから、私はレット――亡き友と同じ場所に立ち続けたい。狩獵の世界から離れれば、その時こそ私は、亡き友を本当に見捨てた

事になる気がして……」

亡き友——レットは、リボンが唯一信頼する獵人だった。彼と共に死線を潜り抜け、彼と共に幾夜を乗り越え、彼と共に多くのモンスターと渡り合った。その時に築いた関係は、恋人や親友、家族とも言えるし、併しその何れでもないような、表現し難い仲だった。どちらかと言えば戦友や同胞の間柄が、一番近いような気がした。

共に狩獵の世界で生きると誓った身。最後までその間柄を崩さず、……一方的に断絶してしまった関係。彼が死んでも尚、狩獵の世界で生き続けたいと思うのは、今までの彼との思い出を過去のモノにしたくなかったからなのかも知れない。

「……全く、やれやれじゃわい。メイドが増えてラッキーだと思っ
たに、その歳で獵人に憑かれた娘じゃとはもう」

肩を竦めて小さく頭を振るワイゼン。その反応に、思わずリボンの顔に喜色が浮かぶ。両隣に立っていたロザとギースも顔を見合わせる。

「では、ワイゼン様……！」

「——良かろう。じゃがな、途中で音を上げるようなら即刻ワシの
メイド行きじゃ。それだけは心しておれよ？」

「はいっ！」

喜色に満ちたリボンの顔には、初めて見る朗らかな笑顔が浮かんでいた。

翌日から始まったのは両腕のリハビリだった。深い裂傷を刻まれた両腕を、正常に動かせるようにしなければ、ハンマーは固よりボウガンでさえ扱うのは難しい。幸い、屋敷には様々なリハビリ用の器具が用意されていたので、リボンはそれを使って毎日、リハビリに精を出した。

始めは動かす事さえ苦痛だったが、何週間、何ヶ月と繰り返す毎に、肉体が順応していく。正常な拳動が可能になるまで半年近く掛かったが、その全てが獵人への復帰と考えれば、リボンにとって苦

ではなかった。

半年近くのリハビリの間、並列でボウガンの扱い方をワイゼンから学んだ。それまでハンマー一筋で生きてきたリボンにとって、ボウガンの知識などほぼ無に等しく、未知の領域……それ故に理解が追いつかない事も多々あった。

多彩な弾の種類、特徴、効果など、全てを記憶し、肉体に刻み込む。どのモンスターに、どの瞬間、どの弾を使うべきか……口頭で告げられる内容を全て記憶し、リハビリ後の実践で確実に行う。全ては、そこからだった。

「……リボンが来てからもう半年じゃけえ、そろそろ実践を開始かう？」

ワイゼン屋敷の前庭で、走り込みをしているリボンを見下ろす形で、部屋の窓から顔を覗かせていたギースがポツリと言を零す。背後の長椅子に腰掛けたワイゼンが、紅茶を口許に運びながら「そうじゃのう……」と濁した言を返す。

「お姉さんの目から見ても、もう充分な感じだと思うけどなあー。」

ご主人様はまだ不満なのかなっ？」

ワイゼンの背後に傳くロザが、彼の肩を揉みながら小首を傾げる。ワイゼンは「そうじゃのう……」と癒された顔で、やっぱり言を濁しつつ応じる。

「……おやっさん？」 「ご主人様っ？」 二人が同時に声を上げて、ワイゼンを見据える。

二人の視線をマトモに浴びても動じずにワイゼンは、小さく嘆息を吐き出すと「――ロザ」と呟き、人差し指を立てる。

「酒場に行つて、この条件に当て嵌まる依頼を探して来て欲しいのじゃが」

続けて放った言葉に、メイドと執事は両眼を見開き、彼の言葉を疑った。

「……ご主人様。それは幾らなんでも酷ではないかな……？」

「ボウガンの実践はまだしちよらんのに、無茶じゃ……！」

メイドと執事の諫言^{かんげん}に首を否と振るワイゼン。彼は涼しげな顔で紅茶を飲み干すと、ソーサーにカップを戻す。

「――ここが分水嶺^{ぶんすいれい}じゃよ。今もワシは、リボンに獵人に戻って欲しいとは思っておらん。今までの努力が報われずとも、あそこまで治癒したなら普通に生活する事は出来る。――獵人となるかメイドとなるか。その見極めが必要じゃろうて」

告げるワイゼンの瞳に暗い光が宿っていた。その光の正体は何と無く判るだけに、メイドと執事は嘆息を零さざるを得なかった。

「……おやつさんはリボンも侍^{はべ}らせたいだけじゃろう？ リボンは本気で獵人に……」

「そうだよ主人様。リボンちゃん、すっごく頑張ってるじゃない！ 止むを得ない時は、ご主人様の脳天を搗^かち割って言う事聞かせよっか！ ねっ、ギース君♪」

「飼い主に牙を剥くのは無理じゃ！？ おやつさんッ、逃げて――ッッ！！」

「ほっほっほっ、まあそう慌てるでないギース。ロザがそんな事をする訳……ロザさん？ 何じゃそのハンマーは？ 欣々^{ニコニコ}笑ってないで答えてロザさん！？ ヒッ、ヒギヤアアアッッ！！」

「……実践、ですか」

ワイゼン屋敷の書齋に呼び出されたりボンは、汗だくの様相でタオルを肩に掛けながら、頭に包帯を巻いたワイゼンの話にそう返した。

「ヌシも随分と回復したじゃろ？ 半年も経ったんじゃ、そろそろ本格的な狩獵を行いたいと思っていたのではないかの？」

「……本音を言うと、そうです。ただ狩場に出なくても、この半年で学ぶ事は本当に多かった。感謝しています」

ぺこり、とお辞儀するリボン。その体つきは半年前より更に女らしさを増し、顔つきも可愛らしいから徐々に美しい趣に移ろいつつ

ある。銃士として必要最低限の筋肉を全身に刻み込み、獵人としての肉体は完成に近い。

そんなリボンの格好はラフなインナーだけ。季節柄、寒くは無いと思うが、ギースの視線がどこか浮ついているのは気のせいではないだろう。

「感謝されるのはまだ早いわい。……ヌシが獵人としてやっていくのか、最終確認を行う。場所は砂漠、相手は——“角竜”ディアブロス」

ワイゼンの発言に一瞬だけ瞠目したリボンだが、すぐに醒めた色に落ち着く。この半年間で、彼女の感情が外に発露する事は多くなつた。始めこそ心が開けず、挨拶も中々返せなかったのだが、今では朗らかな笑みで挨拶をするようになった。

そんな彼女の無機質な表情に、三人の獵人は一抹の不安を覚えずにいられなかった。引き摺るのも無理は無い、相手は彼女の人生を大きく変えたモンスター。……大事な仲間を屠った仇^{かたき}なのだから。

「……ディアブロスの狩獵に成功したら、皆伝と言う訳ですか？」

底冷えするリボンの声には、幾許かの憎悪が含まれている。声質を即座に感じ取ったのだろう、ワイゼンは重たい嘆息を落とす。

「何を戯^{たわ}けた事をほざいとる、リボンや。精々で初伝^{もっ}じゃ。これを以て、ヌシは獵人の世界に戻れると考えい」

ワイゼンの諫言にリボンは感情を見せる事無く黙する。半年を経て獵人に戻る事を喜ぶでもなく、半年も弛^{たゆ}まぬ鍛練を積み重ねてもまだ獵人に戻っただけと落胆するでもなく、彼女が纏う空気からは一切の感情が窺えない。

その違和を感じさせる空気に、ワイゼンは片眉を持ち上げて若干驚きの表情を滲ませる。

「……嬉しくないのかの？」

「……嬉しくない訳が無い」リボンが重力を感じさせる口唇を開き、低い声音を吐き出す。「……私は、今までこの時のために、努力を惜しまなかった。……ワイゼン様には感謝してもし切れません」

「――勘違いするでないぞ、リボン。あくまでこれはヌシが獵人と
して生きていけるか、メイドとして生きていくか、見極めのための
狩獵じゃ。判断次第では、ヌシにはワシのメイドとして生きて貰う
ぞい」

「全力で断ります」

「ほわッ!? な、何を言っとるんじゃリボン!? や、約束した
じゃろ!? 獵人になれなかったらワシのメイドになると!!」

狼狽^{うろた}え始めるワイゼンを見て、冷ややかな態度でリボンが応じる。
「『途中で音を上げるようなら即刻ワシのメイド行き』とは言って
たけど、獵人になれなかったらメイドになるとは約束してない。加
えて言えば、今までの度重なるセクシャルハラスメント行為に私の
忍耐力は既に臨界点を軽く突破しています」

「そ、それは何れ快感に……ッ!!」

「ならないから。それはただの変態だから」

その後、二時間に亘^{わた}るワイゼンの説得も虚しく、リボンは今回の
試練――ディアブロスの狩獵を以て獵人に戻る事が決定した。

「お姉さんが思うにさ、ご主人様のメイドになろうって言う娘って
絶対に変わってると思うんだよねー」

「……オンドレが言うなとツツコミを入れてもいいんじゃないか…
…」

0402. 弟子入り（後書き）

次回、ガツカリ仕様の狩猟シーン（ちよろつとだけ）ですw

それでは次話をお楽しみに♪

0403. 砂漠の暴君（前書き）

ガツカリ仕様の狩猟シーンがちょろっとだけあります。

短編仕様・・・と言う事にしておいてくださいw

では本編をどうぞ♪

0403. 砂漠の暴君

「……本当にその服で戦えるの……?」

過酷な環境として知られる砂漠。日中は軟弱な生物を死滅させる灼熱の世界、夜間は真逆で氷点下の極寒の世界、どちらにせよ、人間には苛烈に尽きる環境である。

厳格な環境に耐え得る生物は、往々にして強靱な生命力を有している。独自の進化を経た結果とは言え、その生命力の強さは人類とは比肩できない程だ。

狩場としてギルドに認定されている地帯へと、アプトノスが牽く竜車に乗って辿り着いたのは、リボンだけではなかった。

荷台に乗っている獵人はリボンを含めて四人。黒子シリーズに龍弓【輪】を装備したワイゼン、メイドシリーズにオーダーレイピアを装備したロザ、コンガシリーズにステイルガンランスを装備したギース、そしてクックシリーズにショットボウガン・白を装備したリボンである。

因みにギースは御者台に座り、アプトノスの手綱を握っている。

「ん〜? お姉さんはいつだってメイド服を欠かさないのさ!」

「ほーっほっほっ! ワシがそう調教したんじゃ!」

「ロザ姐は良く出来たメイドじゃけえ、おやっさんの戯言でも確り守るんじゃ……」

リボンの訝しげな問いかけに、ロザが胸を張って答え、それに気分を良くしたワイゼンが高笑いし、お勞しげに遠い目になるギースと続く。

「……ワイゼン様に仕えていたら、いつかロザみたいになれるかな……」

感慨深そうに呟くりボンに、ワイゼンが透かさず囁みつく。

「そうじゃよ! だからずっとワシのメイドに――」

「それは生理的に嫌」即断するリボン。

「まるで汚物でも見るような目でワシを見ないでッ!？」

悲しそうにロザの胸に飛び込むワイゼンだったが、即座にロザにこめかみをグリグリと拳で抉られ、「うぐええええ」と、あまりの痛みに落涙し始める。

「——おやっさん、着いたぞ」

御者台から聞こえてきたギースの声に、三人は顔を上げる。荷台から出ると、灼熱の陽光が突き刺さり、まるで頭からこんがりと焼かれるような錯覚を覚える。湿度が低いため息苦しさを覚える事は無いが、炎天の世界に脳髓が融けてしまいそうだ。

眼前には自然が形成した岩山が聳^{そび}えている。岩山の外周を回るように築かれた螺旋上の坂道を上り詰めると、砂漠に於いての拠点であるボロボロの天幕^{テント}が見えた。中には簡素な寝台^{ベッド}が置かれ、近くには地下水を汲み上げるための井戸が設置されている。

岩山を刳^くり貫^ぬくように築かれた拠点。直射日光が刺し込む事は無く、割と快適な空間だが、茹^うだるような気温だけはどうにもならず、皆、全身に汗の粒を浮かべている。

「今回の目標はディアブロスの狩猟じゃ。——リボンは四人一組の狩猟は行った事が無いと言っておったな？」

岩山が織り成す影の世界に、ワイゼンは腰を下ろす。直接地面に胡坐^{あぐら}を掻き、皆に腰を下ろすようにジェスチャーする。リボンも胡坐を掻いてから、ワイゼンに首肯を返す。

「仮に今回の狩猟が成功したら、ヌシも猟人として再び狩猟の世界に戻る訳じゃ。四人一組のチーム編成に馴れといた方が良いじやろ。それで、じゃ。ヌシは今回、半年振りの狩猟……勘を取り戻さねばならん。ワシがリーダーを務めるが、最低限の指示しか出さん。——自由にやってみい」

「……了解」

幾許の緊張を孕^{はら}みながら、リボンは頷いて応じる。ワイゼンの言うとおりに、勘を取り戻さねば始まらない。狩場に来たら全て思い出せるとも考えていたが、それは慢心だと気づいたリボンは、認識を

改めた。

面構えにその機微が出ていたのか、ワイゼンは満足そうに首肯を返すと、ぱんっ、と膝を打って立ち上がった。

「では、始めるとするかのう。――狩猟の時間じゃ」

広大な砂漠を二人一組に別れて散策する事になり、リボンはワイゼンと組んで灼熱の大地を彷徨った。蜃気楼が浮かぶ遠方を見晴るかしても、双角の巨像が視界に映る事は無い。

併し、ギルドの情報に誤謬が無ければディアブ羅斯はどこかにいるのだ。渺茫と広がる砂の海の、どこかに……

リボンは意識を全方位に放ち、些細な音も逃さないと言う風に、険しい表情で砂漠を駆ける。その背後からワイゼンが追い駆ける形で走っている。何も走らなければならぬ程、時間に切羽詰っている訳ではない。単に気が急いているだけだ。

――と、尻に何かが触れたのを感じたリボンは、悪寒と共にショットボウガン・白を、振り向き様に構える。そこには頬を緩ませて発情している老爺の姿。その姿を視野に納めたリボンは、重たい嘆息を零すと共にショットボウガン・白を背に戻す。

「……巫山戯ないで。今は狩猟中。幾らなんでも怒りますよ?」

「――嫌な顔をしとったぞ」

「え……?」

だらけた表情を改め、ワイゼンはリボンを見据える。リボンは彼が告げた言葉の意味を量り損ね、二の句が継げない。

リボンが戸惑いを沈黙で返したのを見て取り、ワイゼンは肩に手を置いて、先に前へ進む。

「ヌシは獵人であって、復讐者ではない。そこを履き違えるな、と言う事じゃ」

それだけ告げると、ワイゼンはリボンを追いついて駆け出す。リボンは暫し彼の言葉を頭の中で反芻した後、――表情を引き締め、彼の背を追い始めた。高齢にも拘らず健在な体力で砂地を駆けるワ

イゼンの隣に追いついたリボンは、彼の顔を見ないように口を開く。

「……レットの敵討ちするようになでも見えた？」

「さてな。――併しじゃ、仮にそんな気持ちで狩場に赴くと言うのなら、獵人になる事は諦めた方がいいのう」

ワイゼンの声は軽い。実際そうだが、まるで他人事のような口振りで、リボンに言葉を投げかける。リボンはその意図が判らず、冷たい怒気が胸を焼く痛みに、顔を顰める。

「……ヌシは言ったな。“モンスターから仲間を守る位に強い獵人になりたい”――と」

走りながらだと言うのに、息も切らず言葉を紡ぐワイゼン。年老いても尚、獵人としての伎倆は衰えを知らないのだろう。

ワイゼンの顔に視線を向けると、黒子ノ面隠に隠れてはいるものの、その表情が苦いもののような気がするリボン。

「ワシは今まで獵人の世界で多くのモンスターを狩猟してきた。中には古龍と呼ばれるものもおったわい。……じゃけどな、全部が全部、成功した訳ではない。仲間も、何十人と喪った。自分の小さなミス一つで、仲間の命など軽く消し飛んでしまう」

【獵賢】と呼ばれる老爺の長き獵人人生にも、汚点は幾つも存在する。失敗を何度も繰り返し、仲間を幾度と無く喪い、信賴を無くした事も数え切れないだろう。

「それが獵人の世界じゃ。リボンよ、仮にワシじゃない者を師事したとして、“モンスターから仲間を守る位に強い獵人”に近づく事は出来ても、なる事は絶対に出来ん。それだけは、覚えておく方がいい」

モンスターも獵人同様、生物である事に変わり無い。両者が衝突れば、強き者、賢しき者、どちらが最後まで立っているかなど、相手が絶命する瞬間まで判らない。モンスターを仕留める事、仲間を救う事、それを絶対に出来る獵人など一握り……いや、存在し得ないだろう。

「……それでもワイゼン様は、今も尚、獵人を続けてる」

ワイゼンが語る話は間違っていない。事実、獵人とはそういうものなのだろう。リボンとて、その事を頑なに否定する程、心は幼くない。ワイゼンが仲間を助けられずに狩場を後にし、街へと戻って来た時の心境は、今のリボンなら理解できる。唯一信頼できる仲間を喪った自分だから、喪う怖さと、守る難しさを理解できる。

「きつと私の根幹は、ワイゼン様と同じなんだと思う」

本当にワイゼンと同じ志で狩場に立っているのか問われても、リボンには応えられない。ただ、彼が今、諭^{さと}そうとしているのは、自分が辿ってきた道を他の者には進んで欲しくない意志のような気がしたのだ。

獵人の世界とは、酷く険しい山道なのだと思う。併も、頂上は天空を遥かに超え、人類では到達できない所にある。それでも——この山道を下りる事は、リボンには有り得ない選択だった。亡き友レットの意志を継ぐ——それもあるが、自分には獵人の世界しかないのだと、リハビリと銃士^{ガンナー}の基礎を教わっている時に熟々（つくづく）感じたのだ。

死の淵に立たされて尚、獵人の世界を諦められなかった自分だ、恐らく死ぬまでこの意志は変わらないだろうと、リボンは自嘲の念を懷^{いだ}かずにいられなかった。

彼女の意志をどう汲み取ったのか、ワイゼンは「やれやれじゃない」と嘆息を落とすが、その顔には微笑が浮かんでいるような気がした。

——その時だ。ペイントボールが弾けた時に発せられる、独特の臭気が漂ってきたのは。

「どうやら向こうの連中が先に見つけたようじゃの。——急ぐぞ」足を更に高速回転し、砂の大地を駆け抜けて行くワイゼンに負けじと、リボンも全力疾走を始める。砂の海を駆け抜けるリボンの顔には、どこか憑き物が落ちたような清々しい色が滲んでいた。

地図上ではエリア7と呼ばれている、東側に湖が面した、拠点の

岩山が作り出した影に位置する場所に、その巨像が佇^{たたず}んでいた。：否、佇んでいた、と言うのは語弊がある。――二人の獵人目掛けで突進を繰り返していた。

ギースはステイルガンランスに付随する巨大な盾で双角の突進を真っ向から受け止め、ロザは軽やかな身のこなしで限^{ギリギリ}々のタイミングを見極めて突進を躲している。

巨像の突進を受け止めるも、その勢いを殺す事が出来ないギースは、足から砂埃を巻き上げて後退していく。何十メートルも移動して行くが、押し負けて吹き飛ばされる事は無い。執事でありながら鍛練を積んだギースの健脚^{もっ}を以てすれば、ディアブロスの突進さえも受け止められるようだ。

やがてディアブロスの勢いが止むのは、土壁に獲物を叩きつけた時だ。――が、ギースは寸前で土壁に一瞬だけ浮かせた右足で突き、そこで完全にディアブロスの勢いを殺してみせる。ディアブロスの双角の間に挟まったギースは、奴の双角が壁面に突き刺さった事を確認するまでも無く、ステイルガンランスのレバーを引き、腰だめに構える。

「これでも喰らっちゃれ!!」

ステイルガンランスの先端から青白い火柱が立ち上がり、それがチリチリとディアブロスの顔を炙^{あぶ}っていく。その先端が眩^{まばゆ}く弾けたかと思った瞬間――轟音と共に焦熱^{しょうねつ}が暴君を襲う。

大タル爆弾が爆発したかと思^み紛^{まが}うような轟音と共に、ステイルガンランスの先端から吐き出された焦熱は、ガンランスと言う武器種が扱える必殺の技――“竜撃砲”と呼ばれる、飛竜のブレスを応用した代物である。その威力は――「ゴアア!?」――ディアブロスに思わず踏鞴^{たたら}を踏ませる程の火力を有する。

ディアブロスが踏鞴を踏んでギースから数歩分距離を離れた瞬間、一人の獵人がその股下に潜り込む。オーダーレイピアと呼ばれる双剣を手にしたメイド――ロザである。ディアブロスが困惑している隙を狙って、足の内側を華麗な舞いによって切り刻んでいく。斬撃

を加える、と言うよりも、演舞をしているかのような動きで、ディアブロスに裂傷を刻んでいく。

「ゴオオオ……ガアアア……!!」

バシンツ、と尻尾を地面に強く叩きつけて、鎌首を擡もたげるようにして唸りを上げるディアブロス。その一連の動きに、リボンは見覚えがあった。――怒り。全ての攻撃が加速し、一撃一撃が重くなる状態――激昂状態に入ったのだ。

素早い動きで双角を地面に突き下ろし、両翼を使って地中へと潜って行く砂漠の暴君。それに巻き込まれないように慌てて後退するロザだったが、彼が立てる風圧に思わず動きが止まってしまう。

――その一連の流れにも、リボンは見覚えがあった。次の瞬間に訪れるであろう、最悪の結末が脳裏で再生される。ロザが、亡き友の面影と重なる――

――ベしゃつ、と言う音が聞こえた。

それは悪夢が再現された音ではなかった。――ロザの頭にペイントボールが叩きつけられ、風圧で動きを封じられていた彼女は、その衝撃で動きを再開する。慌てて武器をしまつて走り出した――その瞬間、一瞬遅れて先刻ロザがいた真下からディアブロスが双角を突き上げて飛び出して来た。……そう、一瞬でも遅れていたら、レツト同様、肉体を角で串刺しにされていた所だ。

「助かったよご主人様ーっ！ お姉さん、感謝しちゃうよーっ！」

地中より飛び出してきたディアブロスへと再び肉薄しながら歓喜の声を上げるロザに、ワイゼンは「良い良い、後で体で払ってくればのう」と清々しくも邪心が表出している顔で親指を立てて応じる。

「おやつさん！？ ドサクサに紛れて何を言うてるんじゃ！？」

ステイルガンランスを折り畳み、ディアブロスへと向かう最中にツツコミの声を入れるギース。ロザは眼前に佇むディアブロスへと斬り込みに入りながら「もうっ、ご主人様ったら〜♪ 後で逆エビ固め三十回で、お姉さん許してあげるよ♪」と朗らかな笑みで告

げる。

「恩を仇で返すとはのう……ワシや悲しいぞ……」やれやれ、と肩を竦めて応じるワイゼンは、隣で呆然としているリボンに振り向き、不思議そうな顔をする。「どうしたんじゃ？ 狩猟は始まっとるぞ、しゃきつとせんか」

——ディアブロスが地中へと潜る時に生じる風圧。それを防ぐためには、専用の武具が必要だ。そして防げぬ場合は咆哮同様、短時間と言えど獵人は行動を封じられる。その隙を狙って地中からの突き上げ攻撃を受ければ——如何な獵人^{いか}と言えど、致命傷は忌避できない。現にレットはそれでリボンの前から姿を消した。

その隙をペイントボールの衝撃で復帰させるなど、聞いた事が無い。否、獵人にはそんな事をする余裕など無いのだ。常に武器を構えてモンスターに攻撃を加える事を優先し、如何に素早く狩猟を終わらせるか。そればかりを優先していたリボンにとって、衝撃的な動きをしたワイゼン。

リボンは二人の獵人が懸命にディアブロス相手に立ち回っているのを尻目に、ワイゼンを真正面に見据える。リハビリの内容も、ボウガンの教養も、全体的を射的確に指導し続けたワイゼンだが、セクハラ行為が日常茶飯事で、いい加減な所もたくさんあった。それでも——今ようやく確信した。彼を師事して良かった、と。

リボンは言葉を発さず、一つ首肯を見せると、ショットボウガン・白を構え、ディアブロスと対面する。その顔つきを見て満足そうに口の端に笑みを浮かべたワイゼンも、龍弓【輪】を背中から抜き放つ。

トラウマになっているかと思えたディアブロス。けれどいざ対面してみたら——間近にいる仲間の温もりの方が強くて、恐怖が姿を現す事は無かった。

0403. 砂漠の暴君（後書き）

とっても短い狩猟シーンはこれにて終了です。流石ガツカリ仕よ（ry

次話にて【ベルの狩猟日記】シリーズ通算100話目&【ベルの狩猟日記P】第一部完結になります。

因みに企画は考えていませんw 悪しからず。

それでは、次話をお楽しみに♪

0404. そして彼女は（前書き）

【ベルの狩猟日記】シリーズ通算100話目の物語、短いですが最後までお楽しみくださいませ♪

0404. そして彼女は

「……そうじゃの、及第点と言った所かの」

渺茫^{びようぼう}たる黄砂の海が広がっている只中に、巨像が倒れ伏していた。双角は二本とも半ばから折れてしまい、尻尾も同様に半ばから切断されている。全身に弾痕と裂傷を刻まれたディアブロスの瞳には、既に生氣の色は絶無だ。

剥ぎ取れるだけ素材を剥ぎ終えた四人は、ディアブロスを背凭^{せもた}れにして、暮れなずむ黄昏^{たそがれ}の空を見上げていた。遠方には砂竜・ガレオスが飛び跳ねている姿が見受けられるが、こちらに向かって来る様子は無い。四人が去った頃には、彼らの餌として巨大な屍骸が自然に還る事だろう。

「……今まで有難う御座いました、ワイゼン様」

ワイゼンに視線を向けず、藍色が滲むように浮かぶ空を見上げたまま、リボンは口を開く。その台詞を聞き逃さなかったギースが、驚いたように顔を向けてくる。

「ど、どういう意味じゃ……っ?」

「どういう意味も何も、——もうワシは用済みなんじゃろ? リボンや」

「……………」

ギースの震える声に反応したのはワイゼン。彼もまた、リボンに視線を向ける事無く、瞳を上空に固定したまま、どこか寂しそうな声音で呟く。対しリボンは即座に言葉を返せず、場には沈黙の帳が下りた。

「……そっかあ、リボンちゃんが決めた事なら仕方ないけど、お姉さん寂しいなあ」

ワイゼン同様、リボンに振り向かず言葉だけを返すロザ。その表情は発言どおり、寂しさの色が滲んでいた。ギースは三人の発言に就いていけないのか、視線を三人の間に行き来させて、完全に困

惑していた。

「大事な事は、もう学んだつもり。後は、自分の足で進みます。：でも、ワイゼン様が用済みだなんて、これっぽっちも思ってたません」

そこで一呼吸、間を置き、リボンはワイゼンに振り返った。

「ワイゼン様は、今日を過ぎても、私の大切な師である事に変わりありません」

「ほっほっほっ、じゃったら一生ワシに仕えてみるつもりはないかの？」

「それは万が一にも有り得ません」

「そんなハッキリ言わんでも！？　ワシや悲しいぞ！！　リボンをそんな風に育てた覚えは無いぞ！！」

「育てられた覚えもありませんが」

「うわーんっ、リボンがワシを苛めるんじやうっ！！」

ロザの胸に飛び込んで行くワイゼンだったが、「よしよし、お姉さんが慰めると思ったら大間違いだぞ☆」と鼻を摘ままれて「いふあいつ、いふあいつ」と変な声を上げ始める。

「……あー痛い。全くロザはワシに肉体的苦痛を与え過ぎじゃ。ワシももう若くないんじやから、傷が残ったらどうしてくれるんじや……」鼻を摩りながらロザから離れるワイゼン。その視線がリボンへ向く。「――リボンや。要らぬお節介だとは思うが、これをやるう」

そう言ってワイゼンが黒子ノ装束の懷から抜き出したのは、一枚の羊皮紙だった。リボンはそれを受け取り、中身を検^{あらた}めていく。

「ギルドナイツの推薦状……？」

「ワシの知己がギルドナイツの一人での。口利きが出来ると言うだけの話じゃ。……ヌシが今よりも狩猟の腕を磨きたいと言うのなら、そこへ行く事を勧める。凄腕級の獵人がゴロゴロおるからのう」

ほっほっ、と楽しげに笑うワイゼン。リボンは羊皮紙を握り締めたまま、ワイゼンに視線を向け、――微苦笑を浮かべる。

「……初めから私の目論見など、全てお見通しと言う訳ですか」

「はて？ 何の事じゃ？」^{とほ}惚けるようにワイゼン。

「推薦状は有り難く受け取っておきます」羊皮紙をクルクルと纏め、クックレジストの内側へと納めるリボン。「次に逢う時は――ワイゼン様の隣にいても遜色無い腕前になった時です」

「無理な大言を吐くでない。己を追い詰めるだけじゃぞ？」

「その時はワイゼン様と逢えなくなるだけです、大丈夫です」ふ、と口唇に笑みを刷くリボン。

「何が大丈夫じゃ！ ワシが寂しくなるじゃろ！！」^{ぷんぷん}と怒り始めるワイゼン。

「おやっさん……発言が幼稚過ぎると思うんじゃが……」思わずツッコミを入れるギース。

「お姉さんは楽しみに待ってるよ！ リボンちゃんと一緒に狩獵に行ける日を！」

皆の視線を受けて、リボンはどこかきこちなくはにかみ、――背を向けた。

そして三人の獵人がディアブロスの狩獵を終えて屋敷へと戻ってきた時だ。一人の幼い少女がワイゼンに弟子入りを志願したのは――

それから数年の月日が流れた或る日のラウト村。

「あれ？ ティアリイさん、どこに行くの？」

いつもの時間に酒場へ訪れたベルが見たのは、遠出用に着替えたティアリイの姿だ。以前、オートリアへ向かう時に着ていた私服で、メイド服以上に彼女の可愛さが映える服装である。ウェズが見ると興奮して何を仕出かすか判らない程の。

ティアリイは「はい♪」とはにかみ笑顔を浮かべて大きな鞆を手に応じる。

「昔から手紙をやり取りしていた方からお誘いを受けまして、ちょ

つと遊びに行つて参ります♪」

とても楽しそうに告げるティアリイに、ベルは何かに気づいたように「にやぁ」と意地悪そうな笑みを浮かべる。

「もしかして、好きな相手からのお誘いだったりするう?」

ティアリイは朗らかな笑みを微塵も崩さず、小さく首を否と振る。
「私の命の恩人なんです♪ 偶に顔を出さないと拗ねちゃう寂しがり屋で……」

「へえ……。……って、あたしの師匠もそんな奴でさあ……。……何だか親近感湧いちゃうなあ……。……」

「ふふふ、そうですね♪」

楽しげに笑うティアリイ。何故かティアリイが、自分の奥に映る何かを見て笑っているような気がするベル。

「では、お留守番宜しく願いますね♪」

告げて、ティアリイは酒場を後にする。ベルはそれを笑顔で見送り、思い出したように手を打つ。

「当分はご飯は毎食こんがり肉か……。……」
ぺたり、と円卓^{テーブル}に突っ伏すベルなのだった。

EX4【リボンとワイゼン】——【了】

……………

「こんにちは♪」

「おお、よく来たのう、リボンや」

「あれから如何お過ごしですか?」

「やっぱりベルがおらんと寂しいのう。そうじゃ! これからリボンがここに住めば全ての問題が解決するぞ!」

「それだけは有り得ないのでご心配なさらず♪」

「相変わらず良〜い笑顔でサラッ☆と酷い事を言うのう……。……そうじゃ、あの三人に依頼を出してみたいのじゃが、どうじゃろう?」

「ギルドを介さないのですか？」

「うむ。ワシの私用じゃからの。内容は簡単じゃ。ワシの古い友人の手伝いをしてやって欲しいのじゃ」

「ワイゼン様に友人なんていたのですか？ 初耳です♪」

「……ワシってそんな悲しい奴に見られとったの……？ とほほ……」

「冗談と思わせて冗談ではないのですが、……古い友人と言うと……あの方、ですか？」

「そう言えばリボンは一度逢った事があるんじゃないかな。——そうじゃ、あの変わり者じゃ」

「いえ、ワイゼン様も負けず劣らずの変じ……変態じゃないですか♪」

「今、言い換える必要なかったよね！？ 言い換えなくても酷いけど……！ ワシや普通じゃよ……！ ワシほど色欲に忠実な人間はおらんぞ……！」

「ですから変態と申し上げているじゃないですか」

「変態って言うな……！ ……ともかく！ この依頼、頼まれてはくれんかの？」

「因みに聞きますが、ワイゼン様が依頼を受ければ良かったのでは？ 古い友人と逢えるのなら、積もる話もあるでしょうに」

「ワシはな、リボン。——可愛いオア美しい娘からの依頼しか受けるのじゃよ！」

「流石は変た……色魔ですね♪」

「ふふん、そうじゃろそうじゃろ」

「色魔は否定しないんですか……」

「よしっ、今日はご馳走じゃ！ リボンに美味しいモノを作って貰うぞい……！」

「客人に振る舞わせるとは……いいでしょう。私がいる限りは常にこんがり肉で済ませますので♪」

「中性脂肪が溜まったらどうしてくれるんじゃない！ そろそろメタ

ボを心配せにゃならんと言うのに!!」

「その時は狩猟に出てダイエツトして下さい♪ 良い運動になりますよ♪」

「ダイエツトに出掛けて死んだりしたら笑い話にもならんぞ……」

「それにしても……あの方とベルさん達が逢うとなると……楽しんでそうですね♪」

「人の不幸は何かの味と言うしの。後でまた書簡に認^{したた}めてくれ。楽しみに待っとるわい」

【ベルの狩猟日記P】——第一部——【了】

—予告—

【ベルの狩猟日記7】

—今秋公開予定—

0404. そして彼女は（後書き）

これにて【ベルの狩猟日記P】の第一部、完結と相成りました。第一部完なので、もしかしたら、いつか第二部が始まるかも・・・と、フラグだけ残しておきますw

前書にも綴りましたが、今話が【ベルの狩猟日記】シリーズ通算100話目になります。ここまで一年半以上と、長い道程でしたw

最後に【ベルの狩猟日記7】の予告。予定は未定がデフォの私なので、過度な期待は無しの方でお願いしますw

それでは、ここまでお読み頂き、誠に有難う御座いました。宜しかったら感想など送って頂けると嬉しいです♪

次回作、或いは別の作品で再会できる事を祈りつつ、これにて筆を擱かせて頂きます――（・・）――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6078j/>

ベルの狩猟日記P

2010年12月16日19時55分発行